

大分県文化財調査報告書 第130輯

# 城 前 遺 跡

— 県道赤根真玉線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 —

2001

大分県教育委員会

城 前 遺 跡

## 序 文

国東半島は、「峠入り」に代表される修験の山として独特の世界を作り上げています。またそこに住む人々も、古代以来六郷満山と総称される寺院と関わりを持ちながら生活をしてきました。

そのような地域ですから、今でも各所に古代から中世に起源を持つ景観が残されています。今回調査の起因となった県道赤根真玉線の沿線にも、六郷満山寺院の無動寺や弥勒寺などがあり、日常の生活の中にも、ごく自然にとけ込んでおります。

さて、そのような地域で県道の拡幅工事が行われることになりました。県道赤根真玉線は、以前は幅が狭く車の離合すらできないような道でしたが、増加する観光客の利便性や地元の要望などを考慮し、拡幅工事が行われました。その工事によって新たに発見、調査されたのが今回報告する城前遺跡です。

城前遺跡は、国東ではこれまでごく普通に路傍に見られた五輪塔群の地下の構造や、そのあり方などを明らかに出来た点で、注目される遺跡であります。

この報告書が地域の人々にとって、地域の歴史を見直す契機となり、また歴史の研究にも寄与できますならば幸いです。

最後になりましたが、地元真玉町教育委員会をはじめ、調査にあたり御協力いただいた方々や関係各機関に衷心よりお礼申し上げます。

2001年3月31日

大分県教育委員会教育長  
田 中 恒 治

## 例 言

1. 本書は大分県高田土木事務所が実施した県道赤根真玉線道路改良工事に伴い調査を行った城前遺跡の調査報告書である。
2. 調査は大分県高田土木事務所の依頼を受けて、大分県教育委員会が実施したものである。
3. 付図を除く遺構の実測および現地での写真撮影は調査員が行い、遺物の実測は長野とよみと末政圭子が、写真は五十川雄也が行った。
4. 付図は写真測量により、(株)佐藤設計コンサルタントが行った。
5. 出土した土器類については、県文化課資料室で保管している。石造物については調査区に隣接する清台寺のご厚意で寺の墓地に移設している。
6. 本書の執筆、編集は小柳が行った。

# 目 次

第1章	はじめに	1
	1. 調査に至る経緯と調査の経過	1
	2. 遺跡の立地と環境	1
第2章	調査の成果	6
	1. 調査の概要	6
	2. 遺構と遺物	6
	(1) 溝	6
	(2) テラス	11
	(3) 墓塚等	15
	(4) 線刻板碑	22
	(5) 板碑	22
	(6) 岩屋	23
	(7) 道路	25
	(8) 石造物	34
第3章	まとめ	38
付 章	遺跡周辺の石造物	41
	写真図版	
	報告書抄録	

## 挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	2
第2図	周辺の遺跡	3
第3図	遺跡周辺の地形図	5
第4図	溝実測図	6
第5図	溝出土遺物(1)	7
第6図	溝出土遺物(2)	8
第7図	遺構配置図	9~10
第8図	第1テラス石塔出土状況	12
第9図	第2~8テラス墓坑配置図及び石塔出土状況	13~14
第10図	墓壇実測図(1)	16
第11図	墓壇実測図(2)	17
第12図	墓壇実測図(3)	18
第13図	掘り込み実測図	19
第14図	墓坑出土遺物	19
第15図	線刻板碑	22
第16図	板碑	22
第17図	岩屋配置図	23
第18図	第1~3号岩屋測量図	24
第19図	遺跡周辺旧字図	25
第20図	旧道路側溝出土遺物(1)	26
第21図	旧道路側溝出土遺物(2)	27
第22図	旧道路側溝出土遺物(3)	28
第23図	旧道路側溝出土遺物(4)	29
第24図	旧道路側溝出土遺物(5)	30
第25図	旧道路側溝出土遺物(6)	31
第26図	旧道路側溝出土遺物(7)	32
第27図	旧道路側溝出土遺物(8)	33
第28図	石塔実測図(1)	34
第29図	石塔実測図(2)	35
第30図	石塔実測図(3)	37
第31図	遺跡周辺の石造物	42

## 表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表	4
第2表	出土土器観察表	43
第3表	出土陶磁器観察表	46

## 写真図版目次

図版1	遺跡全景
図版2	溝、墓壇群近景、第3テラス、第5テラス、第4テラス
図版3	第5テラス、第8テラス、磨崖板碑、第1号岩屋、第2号岩屋、第3号岩屋
図版4	第1号坑検出状況、第8・7号、第11・10号、第13・12号、第15・14号、第18・17号、第47・48号坑検出状況、第47・48号板碑、道路跡、清台寺墓地、板碑3、板碑4、清台寺、薬師堂国東塔
図版5	墓坑出土遺物、中世溝出土遺物、近世道路側溝出土遺物
図版6	近世道路側溝出土遺物
図版7	近世道路側溝出土遺物
図版8	石造物

# 第1章 はじめに

## 1. 調査に至る経緯と調査の経過

城前遺跡は未周知遺跡であったが、平成9年の県道関係の事前分布調査によって、工事により削平される山の斜面に石造物が多数あったことがわかった。この時点で既に工事のために移転しており、移転した跡には基礎の痕新しいスタンプが残されていた。幸い地下の掘り返しは行われていなかったため、この部分の本調査を行うことになった。また、山裾部の平坦部については遺構確認調査をおこなった結果、中世の溝が確認され、さらに山裾に五輪塔が散乱しているのが確認されたため、山の斜面から平坦部に掛けて本調査を行うこととなった。

また、本調査対象地区の東側にのびる丘陵の斜面も、本調査と並行して確認調査をおこなった。

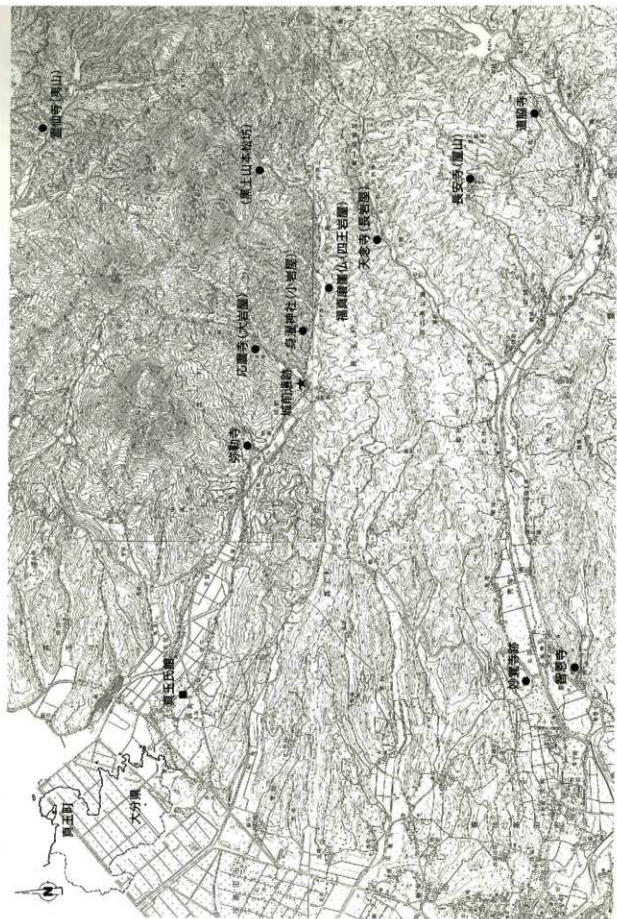
## 2. 遺跡の立地と環境

関東半島の東部に位置する真玉町は、半島中央部の両子山麓から流れ出る真玉川の流域を中心として東西に長く広がる町である。町域の東側半分は関東半島独特の奇岩が織りなす地形が展開するのに対して、西側半分の海岸部は、低平な丘陵と細長い小平野が交互に展開する地形となり、まったく対照的な景観をなしている。

この自然条件の差が、ここに展開する歴史にも大きな影響を与えている。特に中世の開発に係わる荘園（真玉荘、「弘安岡田帳」②）参照）と六郷山（無熟寺など）の成立と展開は、地域的に見事に色分けされている。すなわち、条里の残る海岸小平野部を中心として展開する真玉荘に対して、いわゆる「安貞貞録」①に見られるように、山岳部に展開する六郷山寺院という図式である。

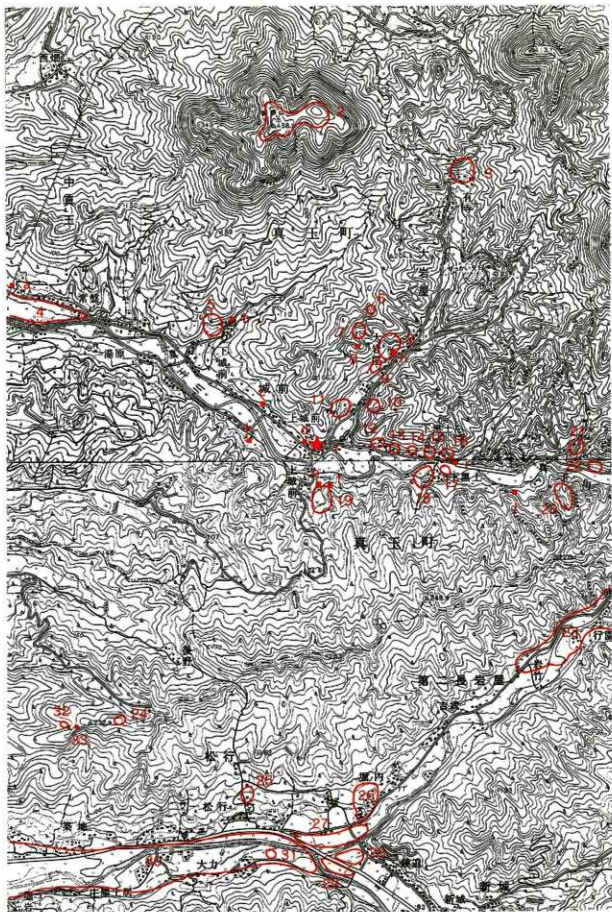
その時、城前遺跡のある城前地区ははたしてどちらに属していたのだろうか。もちろん時代によって移動はあろうが、基本的に真玉荘の領域に属し、その最もし上流側に位置すると考えられる。つまり、城前地区は六郷山の領域と荘園の領域との接点にあたるということができるのである。

<p>②</p> <p>真玉荘七拾丁 宇佐彌助寺領、真玉左衛門次郎兼重孫崎子次郎惟永<small>（地名）</small>、大坂房実秀・五郎惟村、各知行之裏、豊前大炊入道殿孫六郎太郎兼重論之、</p> <p>中略</p>	<p>①</p> <p>六郷山諸修行諸堂役祭等目錄</p> <p>豊後國六郷山諸修行諸堂役祭等目錄</p> <p>中略</p> <p>一 黒土石屋<small>（地名）</small>、本尊馬頭觀音、檢定年中勤修正月會<small>（正月）</small>、觀音講<small>（毎月）</small>、日次勤初後入堂讀誦經典、六所權現於御寶殿、今始修新時長日觀音經三卷、四子手、觀經尼律三遍、</p> <p>一 四王石屋、本尊四天王、檢定年中勤修正月會<small>（正月）</small>、毘沙門講<small>（毎月）</small>、初後入堂讀誦經典、今始修新時長日觀音經三卷、</p> <p>一 小岩屋山、本尊樂師如來、年中勤修正月會<small>（正月）</small>、修二月會<small>（正月）</small>、一夏九旬不斷供花<small>（正月）</small>、一日轉讀大般若會<small>（正月）</small>、修八陣問答講、三ヶ日夜法華不斷經<small>（正月）</small>、天台<small>（正月）</small>、佛名十二尊、月並勤樂師講<small>（毎月）</small>、往生講<small>（毎月）</small>、百座仁王講<small>（毎月）</small>、一萬卷心經會<small>（毎月）</small>、日次勤初後入堂讀誦經典、六所權現於御寶殿、二季祭五節供等、今始修新時長日轉讀大般若經一、</p> <p>一 大岩屋、本尊千手觀音菩薩、年中勤修正月會<small>（正月）</small>、一夏九旬安居勤觀音講<small>（正月）</small>、初後入堂讀誦經典、六所權現於御寶殿、二季祭五節供等、今始修新時長日觀音經三卷讀之、</p>
--	---



第1図 遺跡位置図 (S=1:50,000)





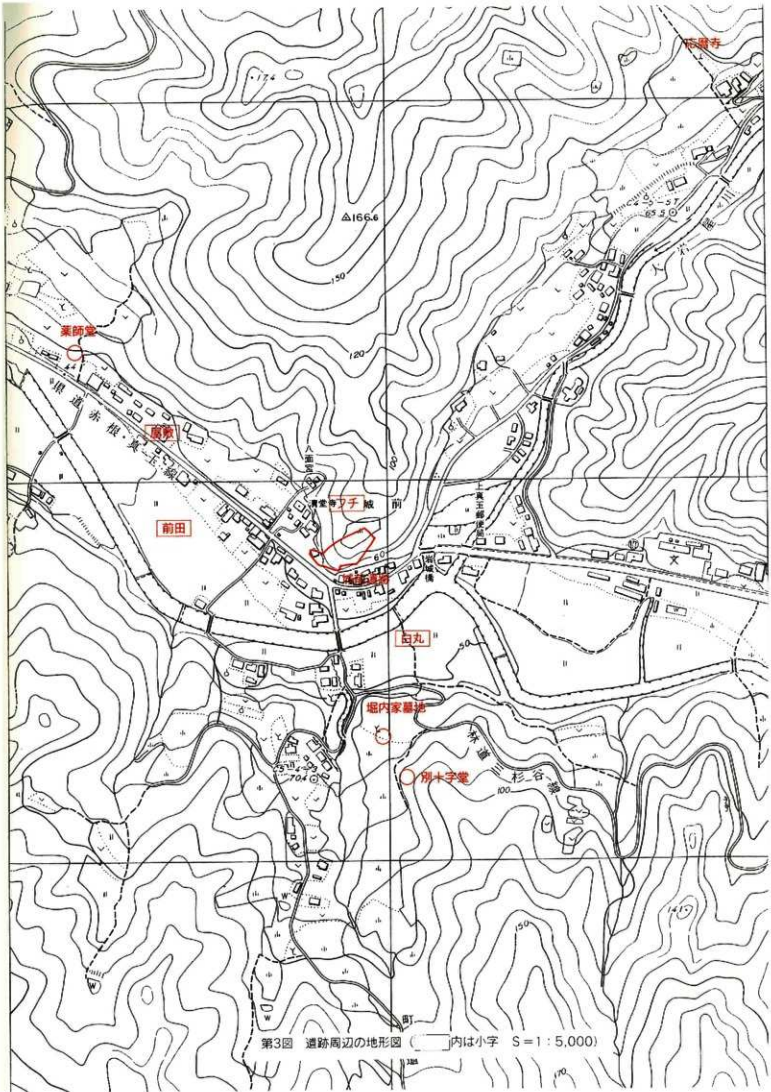
第2図 周辺の遺跡 (S=1:25,000)

- |                   |                     |              |
|-------------------|---------------------|--------------|
| 1 城前遺跡            | 18 無動寺西ノ坊跡(寺院・中世)   | a 山田家国東塔○    |
| 2 猪群山環状列石(祭祀・中世)  | 19 白丸城跡(山城・中世)      | b 三社権現宝篋印塔○  |
| 3 有寺(寺院・中世)       | 20 無動寺中畑坊跡(寺院・中世)   | c 兼師堂国東塔     |
| 4 真玉桑里(古代)        | 21 無動寺仏性坊跡(寺院・中世)   | d 清台寺宝塔○     |
| 5 弥勒寺跡(寺院・中世)     | 22 無動寺講堂跡(寺院・中世)    | e 堀内家墓地国東塔   |
| 6 応曆寺奥ノ院(寺院・中世)   | 23 天念寺(寺院・中世)       | f 別十字堂跡磨崖宝塔○ |
| 7 応曆寺六所権現(神社・中世)  | 24 大畑経塚(古代)         | g 堂の迫磨崖仏○    |
| 8 応曆寺(寺院・中世)      | 25 金宗院跡(寺院・中世)      | h 応曆寺宝篋印塔○   |
| 9 大岩屋下ノ丸遺跡(墳墓・中世) | 26 箕城跡(城郭・中世)       | i 中之坊磨崖仏○    |
| 10 応曆寺不動堂跡(寺院・中世) | 27 小樋遺跡(包蔵地・縄文)     | j 福眞磨崖仏○     |
| 11 下ノ丸坊跡(寺院・中世)   | 28 横田遺跡(包蔵地・縄文・弥生)  | k 堀内家国東塔○    |
| 12 無動寺下ノ坊跡(寺院・中世) | 29 スキサキ遺跡(集落・弥生・古墳) |              |
| 13 無動寺中ノ坊跡(寺院・中世) | 30 荒尾・弘田桑里(古代)      | ○県指定 ○町史定    |
| 14 旧無動寺跡(寺院・中世)   | 31 イセダ遺跡(集落・中世)     |              |
| 15 身濯神社(神社・中世)    | 32 柳谷遺跡(生産・中世)      |              |
| 16 無動寺上ノ坊跡(寺院・中世) | 33 大畑古墳(墳墓・古墳)      |              |
| 17 無動寺東ノ坊跡(寺院・中世) |                     |              |

第1表 周辺遺跡一覧表



調査風景



第3回 遺跡周辺の地形図 ( )内は小字 S=1:5,000

## 第2章 調査の成果

### 1. 調査の概要

調査は、真玉川に向けて突き出した丘陵の先端部分（山の斜面）と、その下の平坦部分の計800mで行った。さらに、板碑が1基単独で建っていた調査区東側の丘陵斜面についても、平坦面（テラス）を中心として確認調査を行った。

その結果、山裾の平坦部で中世前半の溝1条と近世の道路状遺構とそれに伴う側溝が確認され、山の斜面部では数カ所のテラスを形成し、五輪塔などの石造物を立てた中世の墓地在確認された。また、山裾には調査区外も含めて3ヶ所の岩屋状の掘り込みが認められた。

まず、平坦部の中世の溝は幅3m、深さ2mと該期の溝としては大きく、山に向かって一直線（川に垂直）に伸びている。堆積状況も加味すると、この溝は水路ではなく、何らかの区画をなす溝であった可能性が高い。

同じく平坦面で確認された近世の道路状遺構は、北側に側溝を有し、東西方向に伸びている。調査の前にはこの部分は宅地であり、道路の痕跡は無かったが、明治21年に調査された宇図では確認できることから、それ以後廃絶したものであろう。

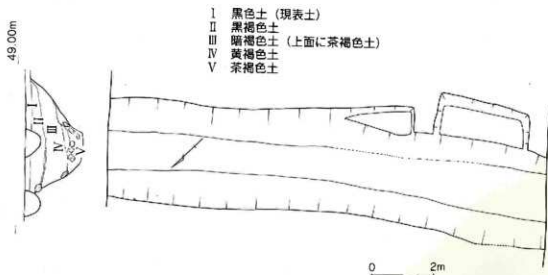
山の斜面では中世の墓地和、それに伴う石造物が検出された。墓坑は計50基あり、それ以外にも板碑を建てたと思われる穴も確認されている。

### 2. 遺構と遺物

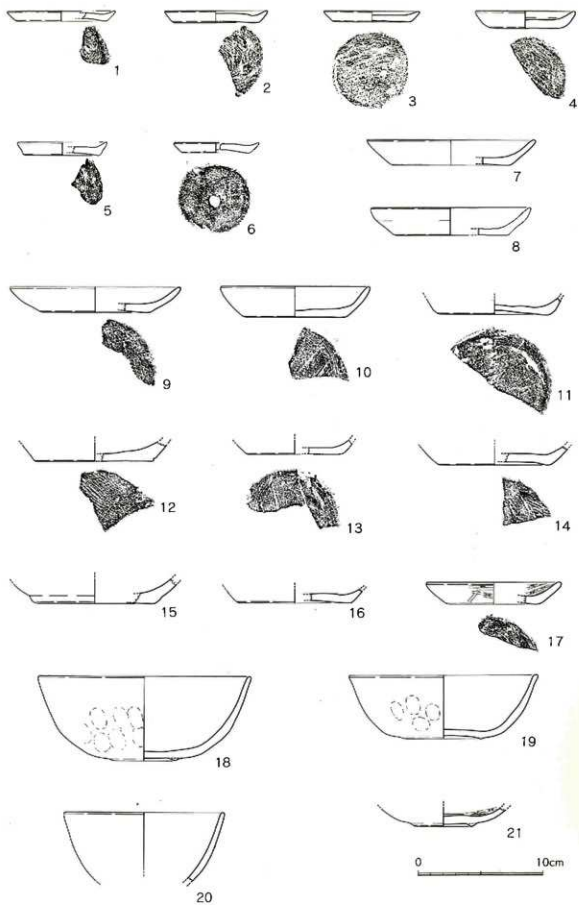
#### (1) 溝

調査区西側の平坦部で確認された。溝は幅3m、深さ2m、断面箱形で、南北に直線状に伸び、北側は山に接続する可能性が高い。調査区の北端ではわずかに地山が張り出しつつあり、おそらく1～2mのうちに山裾に接続するものと思われる。

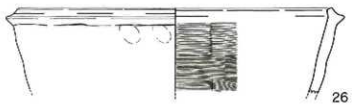
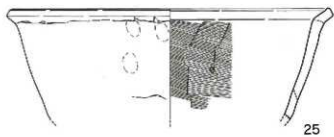
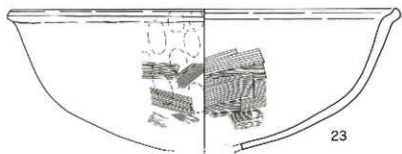
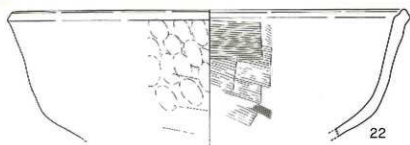
遺物は、1から27までが溝出土遺物である。1から6は小皿、7から16は坏、17から21は瓦器。17は皿、18から21は碗。碗はわずかに高台の痕跡を認めることができる。22から26は鍋、27は鉢。鍋は口縁部を小さく折り、わずかに上方につまみ上げるものと口縁下部に一条の突帯を巡らせるものがある。



第4図 溝実測図



第5回 溝出土遺物 (1)



第6図 溝出土遺物 (2)

遺跡全景



第7図 遺構配置圖 (S=1:500)

## (2) テラス

調査区東半の丘陵斜面には、小さな平坦面が8ヶ所形作られており、それぞれに石造物や墓塚が認められた。第1テラスは、大きな石造物が立ち並んでいたもので、最も標高の高い部分にある。平坦面からの比高差は9mで、丘陵の中段あたりになる。テラスは2から3段の石段を積み、平坦面を確保している。調査に至る経緯でも触れたように、すでに我々が確認した時点では石造物は移転しており、その痕跡が残されているのみであった。調査では慎重に掘り下げを行ったが、墓塚は確認することができなかった。

第2テラスは第1テラスから3.5m下がったところにあり、平坦面からの比高差は5.5mとなる。テラスは幅0.5m、長さ1.2mほどの狭いもので、石造物は無かったものの、4ヶ所の墓塚が確認された。

第3テラスは第2テラスの下に位置するもので、平坦部からの比高差は4mである。幅0.4m、長さ3.8mと細長い。ここでは墓塚は確認されなかったが、五輪塔が2基据えられた状態で発見された。

第4テラスは、第3テラスの下にあり、平坦部からの比高差は2.5mである。本来はさらに西側に延びていたと考えられるが、現状で平坦面をなすのは幅1m、長さ3.3mである。多くの石造物が倒れた状態で発見され、墓塚も1ヶ所確認されている。

第5テラスは調査区の中央部に位置し、最もしっかり作られたテラスである。幅0.7mで長さ6.1mであるが、本来はもう少し東側に延びていたかもしれない。西側はコーナーを作って終わる。背後の垂直面は高さ1mほどで、大部分は表面が剥落しているが、残っている部分には直線的な線刻が複数認められ、さらに上部に板碑の額状の突出部もわずかに認められたことにより、背後の垂直面全面に線刻板碑が作られていたと推測できる。(後述)

このテラスは、深い墓塚は認められなかったが、五輪塔を据えたと考えられる浅い掘り込み3ヶ所と、板碑を据えたと考えられる細長い浅い掘り込み2ヶ所があった。石造物は大部分原位置を保っていないが、多く出土している。

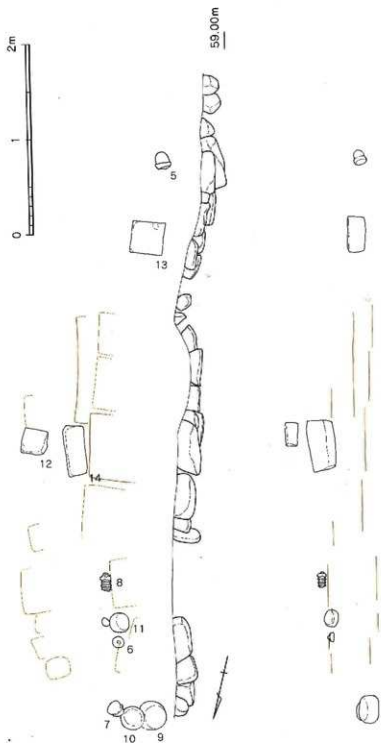
第6テラスは、最も大きなものであるが、明確な平坦面をなしていない。おそらく後世の風化や地崩れが影響したものと考えられる。現状でテラス状をなしているのは、幅最大で2mで長さ10mであるが、西側は調査区外にも延びる。平坦部からの比高差は2mである。このテラスでは石造物は全く出土しなかった。それは、調査開始前まで第5テラスとの間に山に登る細い道があり、その道から西側(第6テラス側)は隣接する清台寺の寺域になり、以前から石造物は片づけていたとのことであるので、本来はここにも石造物があったものである。(片づけたとされる住職は既に他界し現在どこにあるかわからないが、調査区に隣接する清台寺墓地に第1テラスから降ろした石造物の他、多くの五輪塔や板碑があるので、この墓地にあるものの内の一部である可能性が高い。)

墓塚は、基本的に2基一組となっており、それを曲する更に大きな掘り込みを有するものがある。また、テラスの西側部分には、細長い掘り込みが6ヶ所認められ、おそらく板碑を建てていたものであろう。それも含めて28ヶ所の墓塚や掘り込みがある。

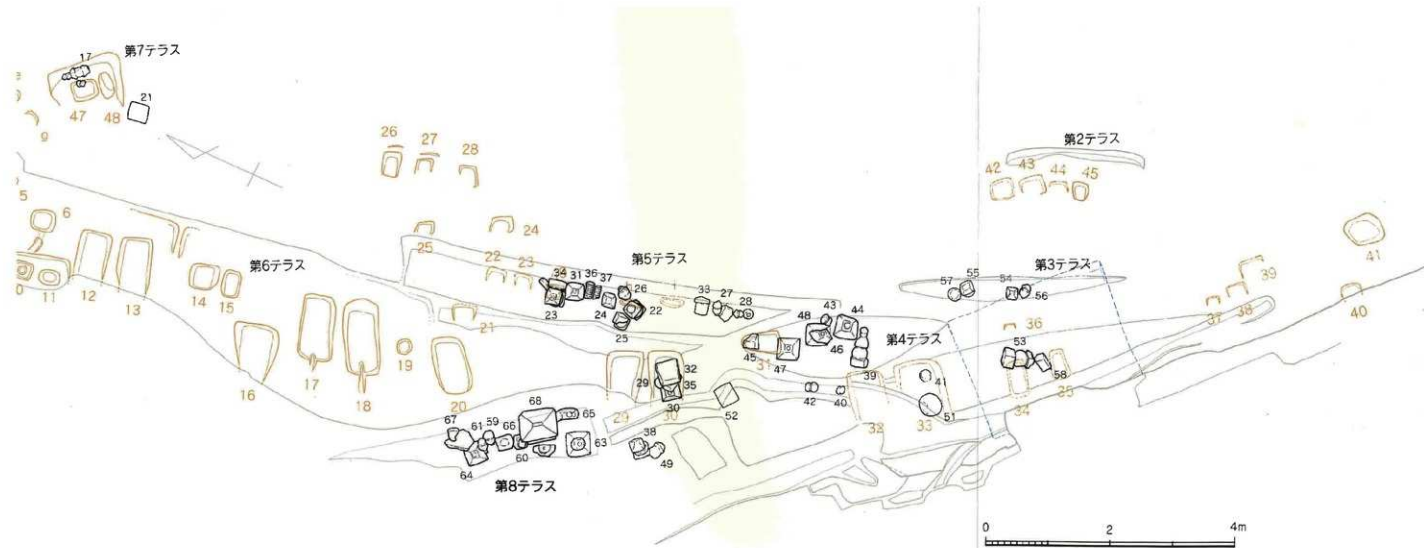
第7テラスは第6テラスから1.5m登ったところにある小さなテラスである。1.3m四方で、平坦部からの比高差は4mである。このテラスは調査前には全く斜面で上に覆われていたが、表土剥ぎの結果、五輪塔が3基と五輪塔のものと思われる地輪2基が出土したことから、確認されたものである。五輪塔は横倒しになっていたが、ほとんど原位置を動いていないと考えられる。五輪塔の下には板状の安山岩があり、その下に2ヶ所の墓塚が穿たれていた。

第8テラスは平坦部から1mの高さにあり、幅60mで長さ4mである。江戸時代と考えられる石造物があり、このテラスは中世以降に削られたものであろう。

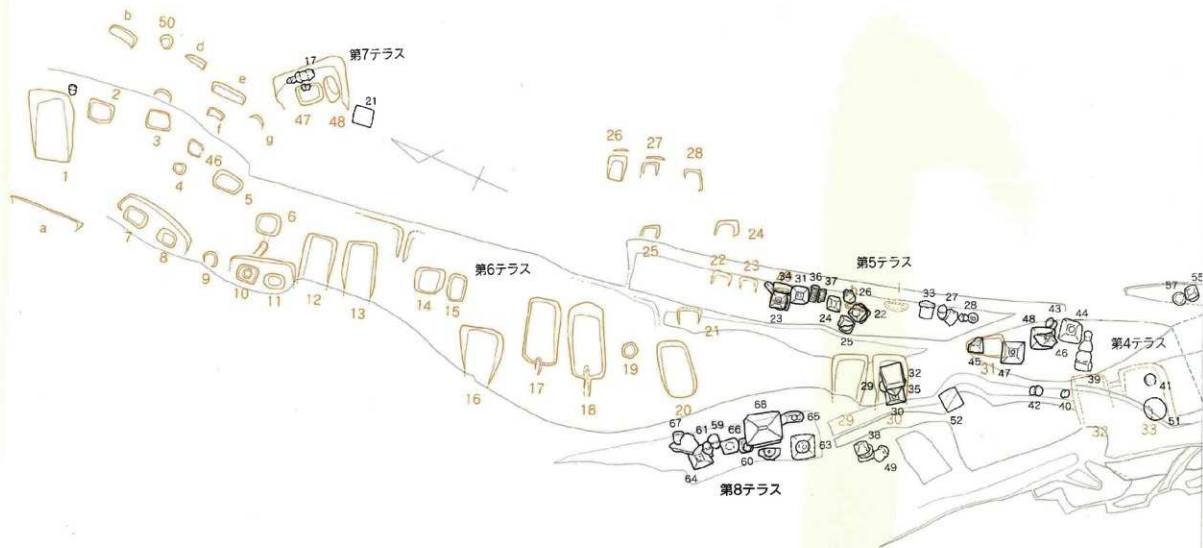




第8図 第1テラス石塔出土状況 (図中の番号は第28図の石遺物を示す。  
茶色は石遺物の基礎のスタンプを示す。)



第9図 第2～8テラス基壇配置図及び石塔出土状況



第9図 第2~8テラス墓塚配置圖及び石塔出土状況

### (3) 墓塚等

墓塚は合計50基確認されている。また、さらに板碑を立てたと思われる長方形や長楕円形の掘り込みも9基あり、ここで併せて説明をしたい。なお、これらの墓塚等はいずれも表土を除去し山の岩盤を露出した状態で検出したもので、いずれも岩盤を削りぬいている。

#### 1号坑

検出時には碑や板状安山岩、五輪塔空輪が充填された状態であった。斜面下側は消滅しているが、短軸長68㍍、長軸残存長1.14㍍である。遺物の出土はない。調査区の最も北側に位置しており、調査区外に1号と平行してややくぼみか認められるので、おそらく2基でセットをなしていたと思われる。

#### 2号坑

1号に隣接する。長軸長42㍍、短軸長32㍍の長方形を呈し、深さは12㍍である。遺物の出土はない。

#### 3号坑

長軸長40㍍、短軸長30㍍の長方形を呈し、深さは17㍍である。遺物の出土はない。

#### 4号坑

調査区北側にあり、単独で存在する。一辺18㍍の方形を呈する。深さは11㍍である。遺物の出土はない。

#### 5号坑

長軸長48㍍、短軸長30㍍の長方形を呈し、深さは8㍍である。遺物の出土はない。

#### 6号坑

墓塚は単独で存在し、40㍍×35㍍のやや丸みを帯びた長方形を呈する。深さは山側で20㍍である。この墓塚でもっとも特徴的なのは、斜面下側に向かってトンネル状に排水溝が掘られていることである。トンネルの外側では、さらに斜面下に向かって20㍍ほど幅14㍍の溝が延びる。墓塚内からの出土遺物はないが、墓塚上部で浮いた状態で五輪塔の風輪が出土している。

#### 7、8号坑

2基ともやや長方形で、両者を囲む1段目の掘り込みを有する。7号は短軸長26㍍で長軸長38㍍、深さ20㍍。8号は短軸長26㍍、長軸長31㍍、深さ17㍍である。1段目の掘り込みは、斜面上側に残っており、長さ1.4㍍で高さは25㍍ある。

#### 9号坑

7、8号と10、11号にはさまれる位置にある。直径23㍍の円形で、深さは12㍍である。出土遺物はない。

#### 10、11号坑

この2基は、いずれも楕円形を呈し、さらに2基を囲む大きな掘り込みを有するなど、密接な関係を示す。大きな掘り込みは、長さ1.0㍍、深さ20㍍で、斜面下側では消滅している。10号坑は2段掘りになっており、1段目は39㍍×30㍍、2段目は22㍍×20㍍のやや楕円形を呈している。深さはそれぞれ12㍍で、全体の深さは24㍍となる。2段目の底面からは焼物が出土している。11号坑は、33㍍×24㍍の楕円形で、深さは18㍍である。内部からは出土遺物はない。

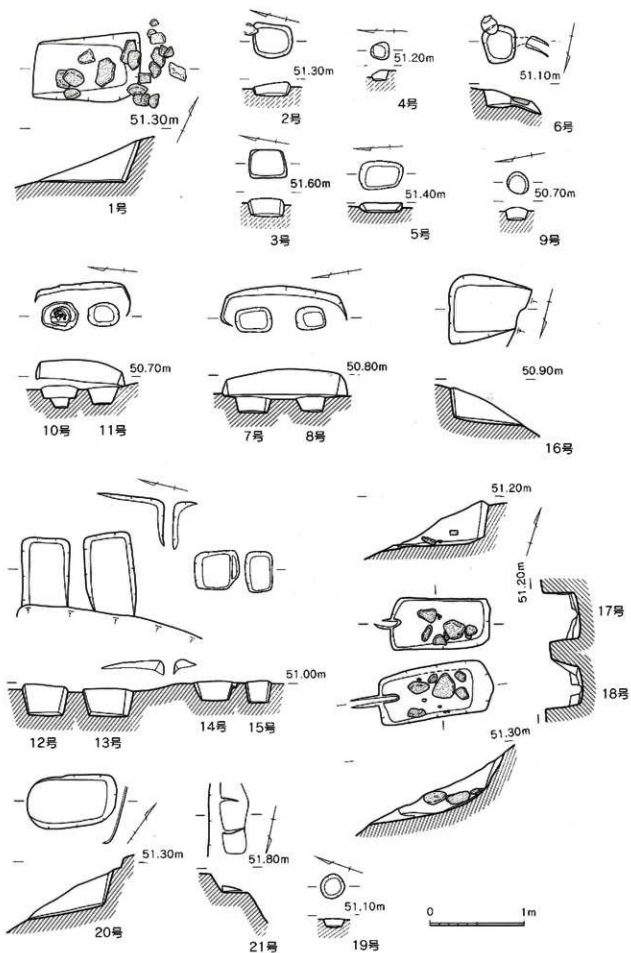
#### 12、13号坑

2基はほぼ平行に作られており、いずれも斜面下側は崩落により消滅している。また、この2基を取り囲むように1段目の掘り込みが存在した可能性が高いが、現状では南東側部が残っているのみである。12号は、短軸50㍍で、長軸は残存長72㍍である。深さは斜面上側で35㍍である。13号は短軸54㍍で長軸は残存長91㍍、深さは30㍍である。いずれも遺物の出土はない。

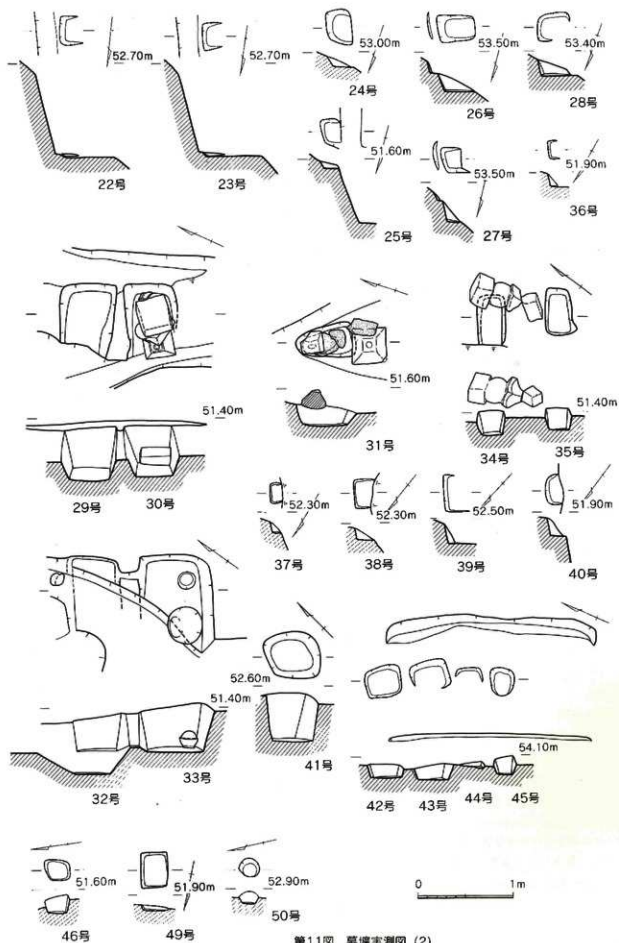
#### 14、15号坑

2基はほぼ平行に作られており、また、この2基を取り囲むように1段目の掘り込みが存在した可能性が高いが、現状では北東側部が残っているのみである。14号は、一辺40㍍の方形を呈し、南側に一段浅い掘り込みがある。深さは21㍍である。15号は短軸28㍍で長軸長42㍍、深さは23㍍である。いずれも遺物の出土はない。

#### 16号坑



第10图 墓坑实测图(1)



第11图 墓坑发掘图 (2)

斜面下側は消滅しているが、短軸長70㍍、長軸残存長88㍍で、深さは32㍍である。遺物の出土はない。大型のタイプであるが単独で存在している。

#### 17、18号坑

17号と18号はほぼ平行して掘られており、ともに斜面下側に向かって、床面から幅10㍍ほどの排水溝を持つなど共通点がある。17号坑は長軸1.06㍍、短軸0.55㍍、深き最大0.46㍍である。18号坑は、長軸は若干山側が崩壊しているが1.14㍍、短軸0.55㍍、深き最大で0.46㍍である。いずれも、床面は若干山側が高く、緩やかな傾斜を持っている。排水溝は、17号が8㍍、18号が18㍍ほど墓坑内部に入り込んでおり、斜面下側にはそれぞれ20㍍と30㍍伸びており、山の傾斜によって終わっている。墓坑内部には、いずれも自然石が入っており、その間から土器片と焼酎と思われる竹片が出土している。

#### 19号坑

18号と20号にはさまれるように単独で存在する。直径25㍍の円形で、深さは10㍍である。遺物の出土はない。

#### 20号坑

斜面下側はやや削られているが、短軸長34㍍、長軸残存長96㍍で、深さは40㍍である。また、斜面上部には1段目の掘り込みがわずかに残る。高さは12㍍である。遺物の出土はない。大型のタイプであるが16号同様単独で存在している。

#### 21号坑

1基単独で存在する。22号や23号同様、浅い掘り込みを有する。長軸（南北）長38㍍、短軸長28㍍、深さは3㍍である。遺物の出土はない。

#### 22号坑

第5テラスの最も北側に位置する。南北30㍍、東西は残存長26㍍で、深さは2㍍しかない。テラスを築造した際、当然土の表土は除去されていたはずであるから、本来から墓壇といえるほどの深さは有していなかったものと思われる。

#### 23号坑

第5テラスのに位置し、22号に隣接する。南北32㍍、東西は残存長20㍍で、深さは3㍍しかない。22号同様、テラスを築造した際、当然土の表土は除去されていたはずであるから、本来から墓壇といえるほどの深さは有していなかったものと思われる。

#### 24号坑

25号の南側斜面にある。西側は斜面によって壊されている。南北38㍍、東西残存長28㍍、深さは11㍍である。遺物の出土はない。

#### 25号坑

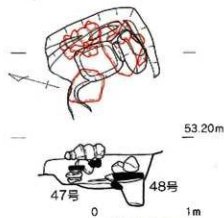
26号から28号のやや下位の斜面に位置し、第5テラスによって切られている。南北30㍍、東西23㍍あるが、東西方向はやや伸びる。深さは8㍍である。遺物の出土はない。

#### 26号坑

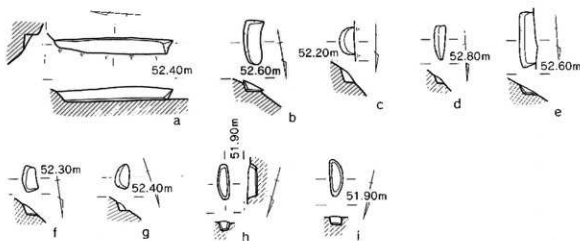
26～28号は明確なテラスが認められない斜面に位置する。長軸長40㍍、短軸長30㍍、深さ22㍍である。さらに斜面上部には、深さ14㍍の一段の掘り込みが認められる。遺物の出土はない。

#### 27号坑

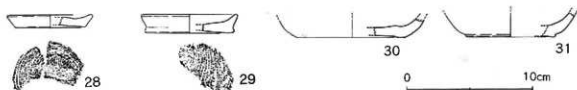
26号と並行する位置に作られる。長軸残存長28㍍、短軸長28㍍、深さ22㍍である。さらに斜面上部には、26号同様深さ10㍍の一段の掘り込みが認められる。遺物の出土はない。



第12図 墓壇実測図(3)



第13図 掘り込み実測図



第14図 墓塚出土遺物

#### 28号坑

27号と並行する位置に作られる。長軸長34㍍、短軸長30㍍、深さ15㍍である遺物の出土はない。

#### 29、30号坑

2基は、ほぼ平行に接するように掘られている。いずれも後世の排水溝によって西側が破壊されている。29号は、短軸長56㍍、長軸残存長80㍍で深さは44㍍である。30号は短軸長55㍍、長軸残存長80㍍で深さは40㍍である。床面は2基ともかなりの傾斜を有している。30号は、内部から五輪塔の火輪と地輪が出土した。

#### 31号坑

1基単独で存在する。長軸長62㍍、短軸は南側が広く36㍍、北側は25㍍、深さは22㍍である。形態は梨形を呈する。検出面で五輪塔の火輪2基が出土している。

#### 32、33号坑

2基はほぼ平行に接するように掘られている。いずれも後世の排水溝によって西側が大きく破壊されている。32号は、短軸長推測で60㍍、長軸残存長78㍍で深さは39㍍である。33号は短軸長78㍍、長軸残存長1.04㍍で深さは46㍍である。33号の内部からは五輪塔の空風輪と水輪が出土している。

#### 34、35号坑

2基は、やや間が空くが、ほぼ平行に接するように掘られており、同形同大でありセットと考えられる。34号は短軸長28㍍、長軸残存長53㍍で深さは23㍍である。35号は短軸長28㍍、長軸残存長50㍍で深さは22㍍である。いずれも明確な角部を持った長方形の墓塚である。34号の検出時に一石五輪塔が倒れた状態で検出されているが、本来のものがどうかは確認できない。

#### 36号坑

南北14㍍、東西残存長10㍍と規模が小さい。深さは15㍍である。遺物の出土はない。

#### 37、38、39号坑



3基は隣接して存在する。37号は南北22%、東西残存長12%、深さは12%である。38号は南北32%、東西残存長22%である。39号は南北40%、東西残存長26%である。いずれも、角部をしっかりと持った方形になる。

#### 40号坑

調査区の南側に位置する。短軸長22%、長軸長22%で深さは18%である。遺物の出土はない。

#### 41号坑

調査区の最も南側に位置する。これより南側は斜面がきつく、墓塚は存在しない可能性が高い。墓塚は50%×60%のやや崩れりの長方形で、深さは50%と深い。遺物の出土はない。

#### 42、43、44、45号坑

4基は第2テラスに並んで存在する。斜面上側にはテラスを造成した掘り込みがわずかに残っている。42号は長軸長38%、短軸長28%で長方形を呈する。深さは5%である。43号は長軸長38%、短軸長34%で長方形を呈する。深さは13%である。44号は長軸長40%、短軸長32%で長方形を呈する。深さは16%である。45号は長軸長30%、短軸長17%である。深さは5%である。46号は長軸長30%、短軸長25%で隅丸の長方形を呈する。深さは18%である。

#### 46号坑

長軸長26%、短軸長22%の長方形を呈し、深さは18%である。遺物の出土はない。

#### 47、48号坑

第7テラスにある。調査前にはまったくテラスは確認できず、表土除去作業の途中で五輪塔が出土したことから、その存在が判明した。周辺には石塔の頂で述べのように、一石五輪塔3基と五輪塔の地輪2基が出土している。その内、確実に直接墓塚に伴うと考えられるのは1基（第29図17）である。五輪塔は傾倒しになっていたが、周辺には五輪塔を支えていたと思われる碑があり、本来48号坑の上に立てられていたと思われる。五輪塔の下には蓋石と考えられる板状の安山岩があり、その下部に墓塚（48号）があった。墓塚は24%×48%の楕円形で、深さは35%である。47号は48号に隣接するが、6%と浅い。44%×36%の長方形である。いずれも遺物の出土はない。

#### 49号坑

第5テラスにあり、23号に隣接する。22、23号同様浅い掘り込みである。長軸長38%、短軸長28%である。深さは5%である。全形のわかるこの例では、長方形を呈し、仮に五輪塔などの基礎部を据えるための掘り込みだとしたら、違和感がある。やはり、焼取を取る穴と理解したい。

#### 50号坑

調査区北側で、単独で存在している。

#### a号坑

調査区北端に位置し、第6テラスの下側斜面にある。長さ1.27m、幅17%の長方形を呈す。斜面下側は若干の削平があると考えられる。当初、墓に至る道のステップとも考えられたが、この周辺に後述する同様の遺構が検出されたので、石塔を据えるための穴と考えられる。

#### b号坑

第6テラスの上側の斜面に位置する。長さ48%、幅18%で、深さは10%である。

#### c号坑

50号の下位に位置する。長さ29%、幅10%で、半円形を呈す。深さは16%である。

#### d号坑

第6テラスの上側の斜面に位置する。長さ37%、幅12%で、深さは8%である。

#### e号坑

第6テラスの上側の斜面に位置する。長さ60%、幅18%で、深さは9%である。

#### f号坑

第6テラスの上側の斜面に位置する。長さ30㍍、幅15㍍で、深さは12㍍である。

**g号坑**

第7テラス下側にある。長さ27㍍、幅16㍍で、半円形を呈す。深さは16㍍である。

**h号坑**

第5テラスに位置する。長さ36㍍、幅12㍍の長方形で、深さは10㍍である。

**i号坑**

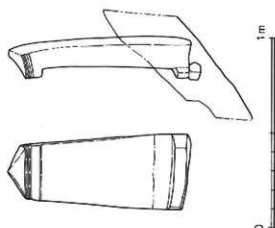
第5テラスに位置する。長さ38㍍、幅13㍍の長方形で、深さは8㍍である。

以上の内、墓塚と考えられるのは第1号坑から第50号坑、石塔を立てたと思われる掘り込みは第a号坑から第i号坑である。後者は、h、i号を除いて急な斜面に位置するのが特徴である。

墓塚からは第14図28～31の土師器が出土している。いずれも流れ込みの状態であり、墓塚内へ意図的に詰めたものではない。28は1号坑と4号坑出土、29は15号坑と17号坑、30は1号坑、31は17号坑出土である。

(4) 線刻板碑 (第15図)

第5テラスの背面に割まれている。キャンパス面の9割以上の表面が剥落しており、残存しているのはごくわずかである。顔部と考えられる部分は2ヶ所で認められ、約5°の突出である。連碑を分ける縦線は壁面の半分から左側の下部に残るが、現状で17本認められる。その間隔は概ね12°であり、壁面の長さか約6mであることから、本来は50基程度の連碑が揃っていたものと推測される。

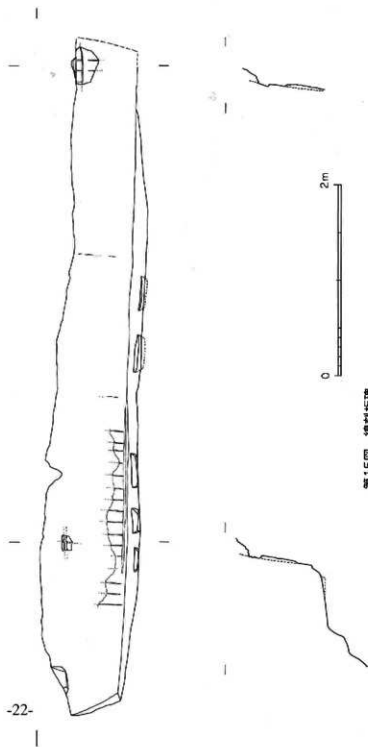


第15図 線刻板碑

(5) 板碑 (第16図)

全面表上剥ぎを行った調査区の東側の丘陵斜面に、1基のみ単独で立っていた。第16図のように、下部40°を地中に埋め、ほぼ垂直に据えられていた。上部の顔部は約6°突出し、また顔部から頭部にかけてはやや反りながら尖る。身部はやや幅広くであるが、若干背面が湾曲する。線刻や墨書などは認められなかった。

以上の形態的特徴から、本板碑は南北朝期から室町時代前半に位置づけられよう。



第16図 板碑

## (6) 岩屋

調査区内で2ヶ所、隣接する調査区外で1ヶ所の「岩屋」が存在する。それぞれ形態が異なり、「岩屋」と呼べるものか、あるいは「かん」なのか判断できないが、一応「岩屋」という呼称で統一しておく。

### 第1号岩屋

調査区の中央からやや東側にある。開口は横2.1m、縦2.1mの方形で、岩屋本体は2.7m×2.1mの方形で、天井までの高さは2.5mある。

入り口部の壁面には、幅6cmの一段口の掘り込みが認められ(a)、その上部には斜めに直線上の掘り込み(b)もある。後者の掘り込みは何らかの施設の屋根の庇がはめ込まれていたと考えられる。また、ほぞ穴と考えられる方形の孔も数カ所にあり、岩屋の前面に施設があったことが想定できる。

内部は最近まで物置として利用され、戦時中は拡張して防空壕としても利用していたということで、当初の形態がいまひとつはっきりしないが、二段掘りになっていることや、岩屋と一体となった施設が存在が想定できることなどから、何らかの宗教施設であったことが推測できる。遺物が全く出していないので時期は不明とせざるを得ない。

### 第2号岩屋

調査区東端にある。ほぼ垂直の壁面に二段掘りで「かん」を穿ったもので、厳密には「岩屋」ではないが、仏像などを安置していたものであろう。一段口の掘り込みは縦1.5m、横2.2m、奥行き50°、二段目は横1.4m、奥行きは20°である。

### 第3号岩屋

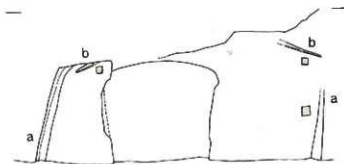
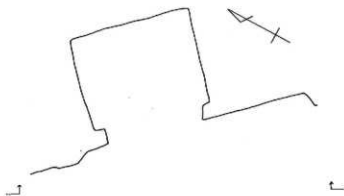
調査区に隣接する岩屋で、通称「がらじん様」と呼ばれている。開口2.4m、高さ1.1mで奥行き1.2mである。天井部から奥壁に向かっては緩やかに曲線を描く。床面は向かって右側が一段高い。壁のあり方から見ると、この部分は拡張したものであろう。

内部には六体の石造人物像が安置されている。これらは、江戸時代に別の場所から持ってきたと言われており、火伏せの信仰を集めている。人物像については、烏帽子を被った男像と髪を垂れた女像、僧形の人物像の三体が大きく、他は僧形二体と髪を垂れた女神像?一体である。

調査区外であったため、内部の発掘調査は行っていないので遺物の出土はない。

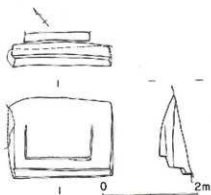


第17図 岩屋配置図

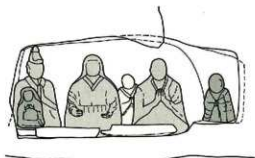
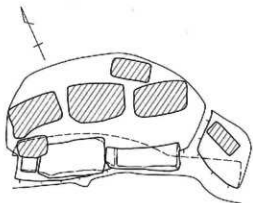


第1号岩屋

0 2m



第2号岩屋



第18図 第1～3号岩屋測量図

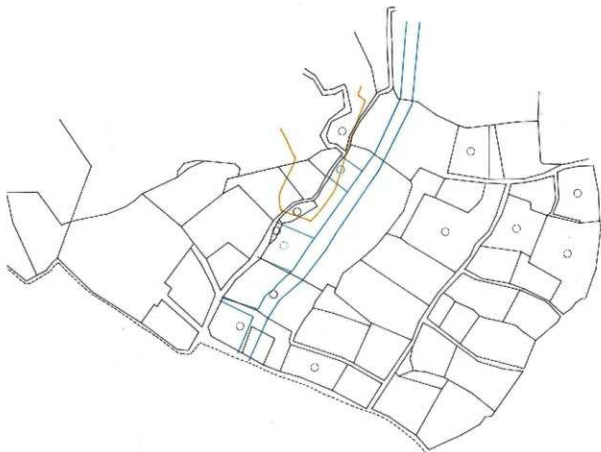
第3号岩屋 (ガラジン様)

0 1m

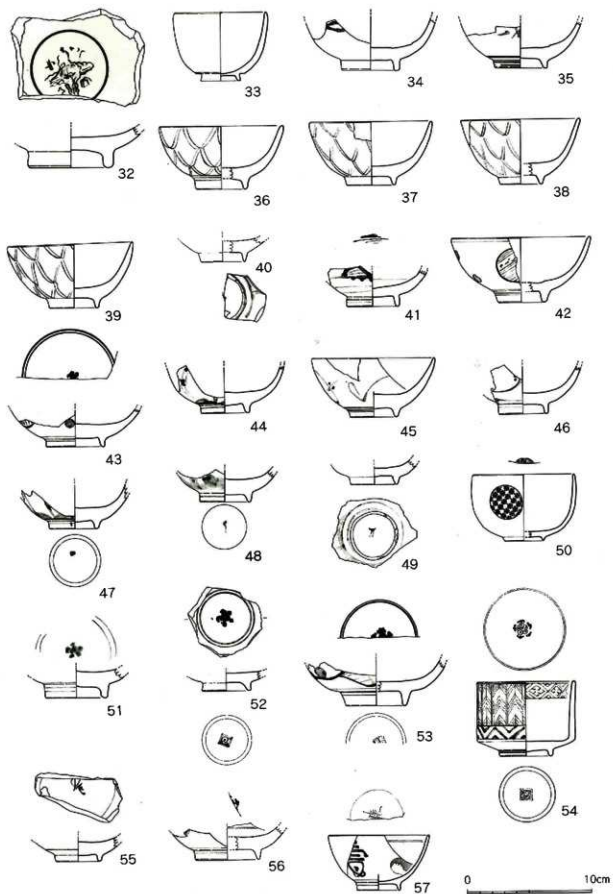
(7) 道路

調査前には、調査区には民家が建っていたが、明治21年調製の字図（第19図）には旧道が延びていた。その道路側溝と考えられる溝が検出された。山側は石段を作り、道路は硬化していた。南側は一段の段落ちのみであり、道路南側には道路より一段低い水田か畑地が展開していたものであろう。

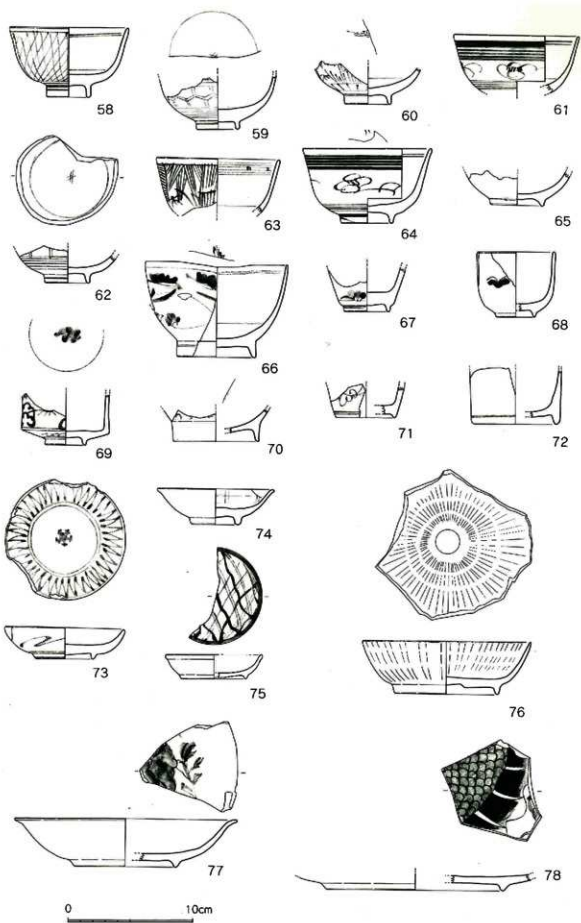
側溝からは第20図から27図の遺物が出している。32から98は磁器。99から116は陶器。117から125は瓦質土器。126から143は土師質土器である。



第19図 遺跡周辺旧字図（小字フチの部分）

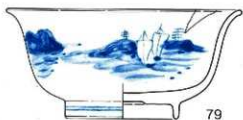


第20圖 旧道路側溝出土遺物(1)

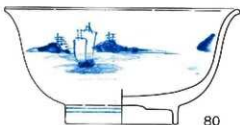


第21図 旧道路側溝出土遺物(2)

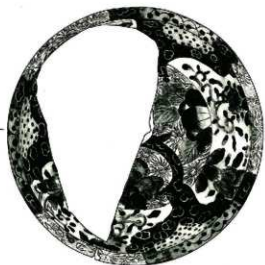




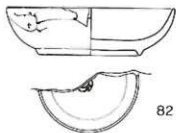
79



80



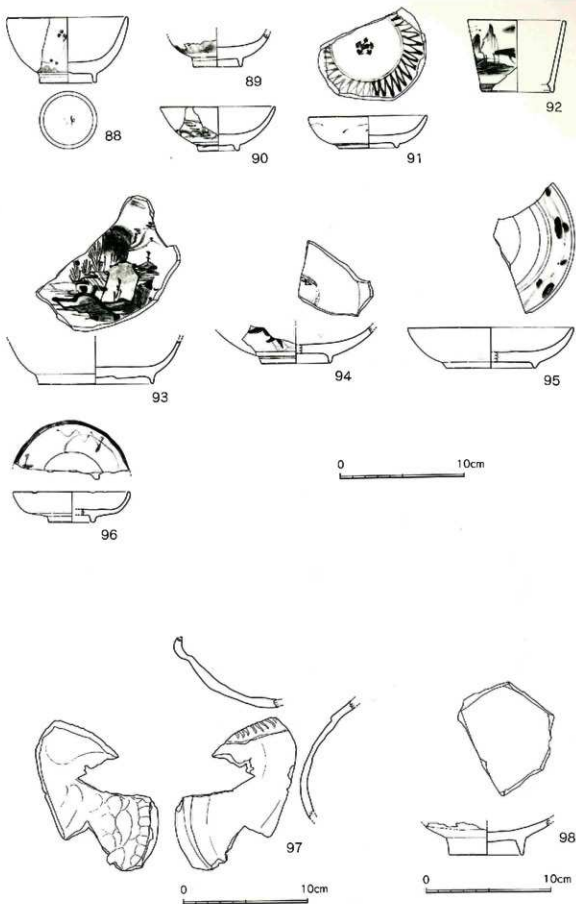
81



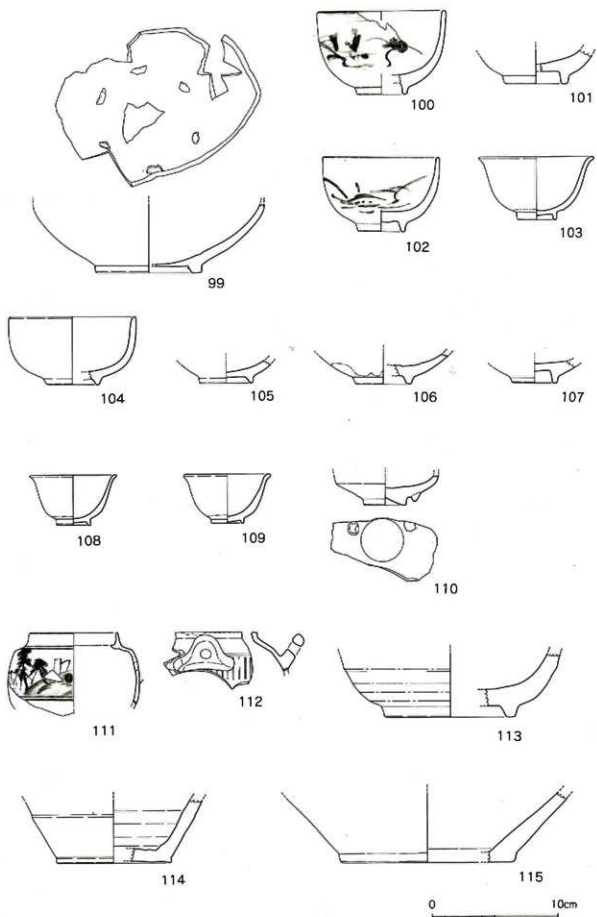
82

0 10cm

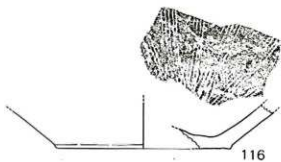
第22圖 旧道路側溝出土遺物 (3)



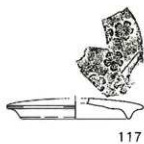
第23図 旧道路側溝出土遺物 (4)



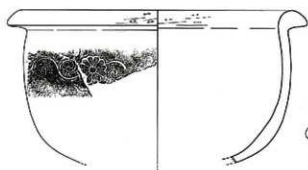
第24図 旧道路側溝出土遺物 (5)



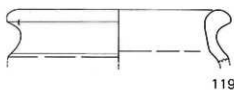
116



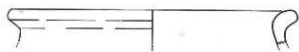
117



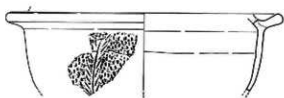
118



119



120



121



122



123



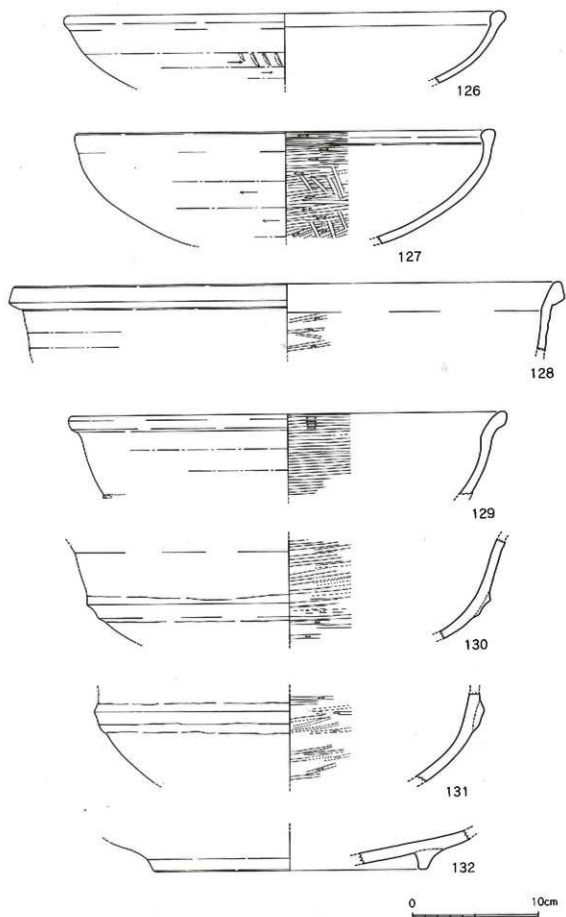
124



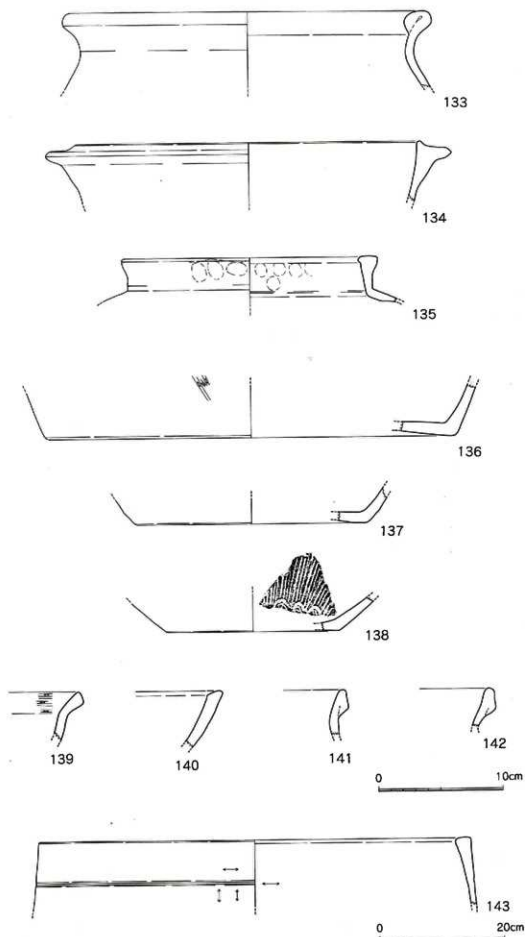
125

0 10cm

第25図 旧道路側溝出土遺物 (6)



第26図 旧道路側溝出土遺物 (7)



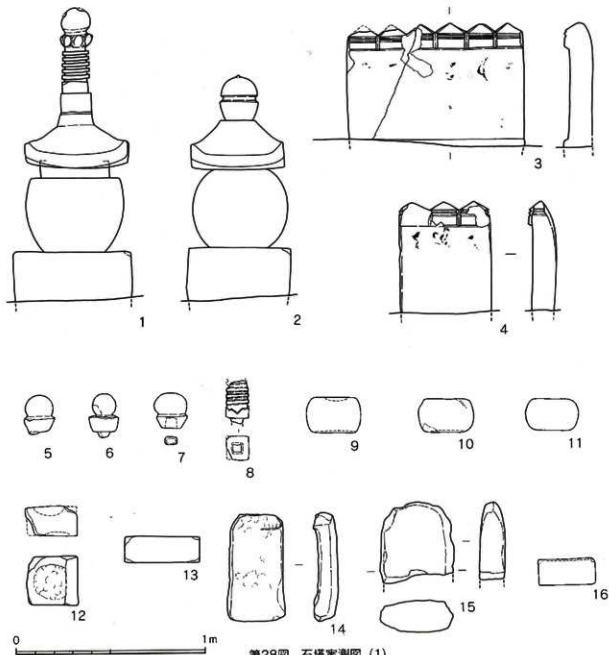
第27図 旧道路側溝出土遺物 (B)

(8) 石造物

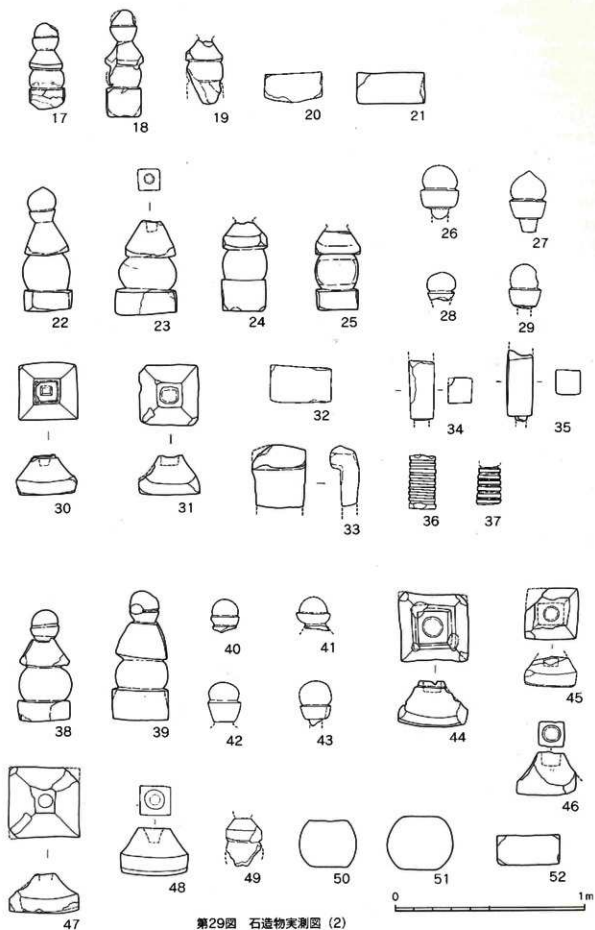
1から4は第1テラスにあったもので、調査前に所有者の手によって隣接地の寺の墓地横に降ろされて、すべて基礎がコンクリで固定されていた。1は宝塔で、全高1.5倍の中型品である。全体のバランスに優れた優品である。しかし、相輪下部が欠損しており、本来あるはずの九輪が6本しか認められない。また、無文の露盤下部もセメントで継いでいる。宝珠下部の蓮花は単弁で浅い浮彫りになっており、空輪の隅は端部で強く反る。また、首部を持つ塔身は下位にいくほど引き締まる。銘、納入穴は認められない。年代的には鎌倉時代後半代から南北朝期が想定できる。

2は大型の五輪塔である。現在基礎（地輪）はコンクリで固定されており、全高は不明であるが、現在1.2倍である。水輪の大きさに比べ、火輪以上が若干贅重な印象を受けるが、すべて当初のものと考えられる。空風輪は全体に卵型を呈し、中央を溝で区切って空輪と風輪に分けている。火輪は照屋根で、隅部はシャープに反る。水輪はほぼ球形を呈する。時間的には1の宝塔と同時期であろう。

3、4は連碑である。3は6連の板碑で、それぞれに墨で梵字が書かれている。左側半分はひびが入り、一部



第28回 石塔実測図 (1)



第29图 石造物実測图 (2)



欠損しており風化が激しいため、墨書の残りもよくない。また、梵字の下部にも小さな字で墨書が認められるが、残念ながら読むことはできない。額部はシャープに突出しており、二条の切り込みもシャープである。切り込みは側面までは及んでいない。4は3連の板碑で、同じく表面にはそれぞれ墨書で梵字が認められる。梵字の下部にも小さな字で墨書が認められるが、読むことはできない。3に比べてややシャープさに欠けるが、額部切り込みは側面まで及ぶ。年代的には1、2と同様、いずれも鎌倉時代後半から南北朝期のものであろう。

1から4は第1テラスに残された基礎部のスタンプから、図9の様に配置されていたと想定できる。その他のスタンプは多くは五輪塔と考えられるが、降ろされた墓地に他の五輪塔と混在しており、特定ができなかった。

5から14は第1テラス出土品。5から7は空風輪。いずれも小型の五輪塔のもの。7は通常と異なり、ほぞ穴があいている。8は宝塔などの相輪部。請花部は下から見ると方形になっている。9から11は五輪塔の火輪。いずれも扁平なもの。12、13は基礎部。12は両面に浅い円形の凹みがある。14は板碑状の石造品。額部や基礎部の突出やわずかな反りなど、板碑の要素を備えており、表面のはみ類が明瞭に残るなど未製品の可能性が高いが、板碑を模した石造品の可能性も残る。

15と16は、第1テラスの南側の平川部から出土したものである。15は自然石を板碑状に加工しようとしたものか。ただし、額の表現はなく、単なる塔婆の可能性が高い。16は五輪塔地輪。

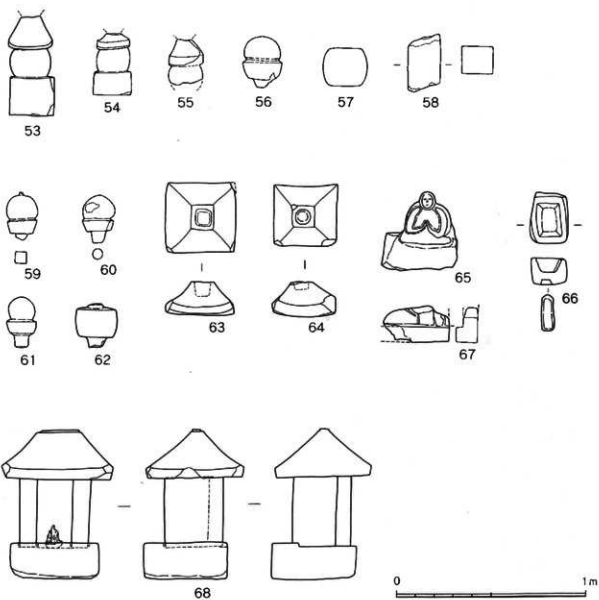
17から21は第7テラス出土品。調査の途中の表土剥ぎ段階で原位高を離れたものが多く、17と20のみが出土位置を特定できた。17は、完形で小型の一石五輪塔である。今回の調査で唯一下部に遺構を伴う位置で検出できた。火輪から地輪までの最大幅が同一であり、方柱状の石材を加工して作ったことがわかる。4面には種子が墨書されているが詳細は不明である。地輪最下部は荒削りのままである。18、19も17と同じく方柱状の石材を加工して作った一石五輪塔である。17に比べてやや全高が高い。20、21は地輪。

22から37は第5テラス出土品。22から25は一石五輪塔。ただし、23は空風輪のみ別材となる。22、23の火輪は直線的で、まったく反りが認められない。23は水輪が扁平で、全体的にゆがみがある。24、25はやや小型で、方柱状の石材を加工したものである。特に23は方柱状の石材の面を強く残している。26から29は空風輪。26、27は大型の五輪塔になるかもしれない。30、31は五輪塔の火輪。30はわずかに露盤を作り出している。いずれもやや方形のほぞ穴を穿つ。32は地輪。33は板碑で、墨書の梵字が認められる。34、35はほぞを持つ方柱状の部品であるが、石造の塔の関係ではこのような部品は考えにくい。あるいは別な用途を持った石造物であった可能性もある。36、37は宝塔などの相輪。

38から52は第4テラス出土品。38から42と49は一石五輪塔。38、39の火輪は直線的で、ほとんど反りがない。44から48は五輪塔の火輪。いずれも空風輪を載せるほぞ穴がある。屋根にはやや反りが認められる。44は露盤を形づくる。46には梵字（ラー）の黒書が認められる。50、51は五輪塔の水輪。52は地輪。

53から58は第2テラス出土品。53から55は小型の一石五輪塔。56は空風輪、57は水輪である。58は方柱状を呈する石材。34、35と同様のものであり、用途は不明。

59から68は第8テラス出土品。59から62は五輪塔の空風輪。ただし、62は空輪部分の形状が不明。63、64は火輪。65から68は江戸時代の遺物。65は両手を胸の前で合わせる地蔵をレリーフ状に浮彫りにしたもの。台石と一体となる。首には布が巻かれており、現在まで信仰の対象になっていたことが窺える。66は天保6年の銘が入るが、用途は不明。片面には深さ6センチの彫り込みが、片面には溝状の彫り込みがある。68は組み合わせ式の石祠。屋根は寄棟式となる。内部には素焼きの神像が据えられていた。



第30图 石造物実測図 (3)

### 第3章 まとめ

ここでは、遺物・遺構の評価を通して、城前遺跡の位置づけについて考えてみたい。

#### 石造物

城前遺跡出土石造品の位置づけについて、付章で述べる周辺部の例などを参照しながら考えていきたい。まず、全体の年代的な位置づけである。石造品には紀年銘が無くそれ自身からは年代はわからない。一石五輪塔については、築造順序で後に位置づけられる可能性が高い上位にある第7テラスや第5テラスに小型のものが多くことから、この城前遺跡では、山腹にあるまず第1テラスが作られ、次いで山裾から上に向かってテラスが作られていったと考えられる。第1テラスと山裾部のテラスでは、時間的にも性格的にも差があった可能性が高い。

それは第1テラスにおいては明確な墓壇が検出されなかったことからいえる。むしろ、墓に伴わない供養のための場であった可能性が高いのではなかろうか。

第2テラス以下は明確な墓壇があり、大部分墓に伴う供養塔である。

#### 墓壇

調査区内では、計50基の墓壇が確認された。これらの墓壇は大きく分けて2形態ある。一つは長方形の大型のもので、仮にAタイプとする。もう一つは小さな円形又は方形のものでBタイプとする。あり方を見ると、Aタイプがほぼ等間隔で二基1セットで分布し、その周辺にBタイプが原則二基1セットで分布している。そして、Aタイプはほぼ同一標高に築かれており、テラスの形成とは一見何の関係も無いように見えるのに対して、Bタイプはテラスに規制されながら存在している。これは、AタイプとBタイプの違いがその性格の差から来るものではなく、時間的な差があることを示すものと考えられる。

それぞれ出土遺物が少なく、明示出来るのはAタイプのもののみであるが、15世紀と考えられる。出土石造物、特に五輪塔から導き出される年代観は、前節で述べたように第1テラスを除くと15、16世紀に納まることと考えられることから、いずれにしてもこの年代幅でAタイプとBタイプが造られたと考えられる。その場合、やはりAタイプが最初に造られ、後にBタイプが造られたと考えるのが妥当であろう。つまり、第1テラスの位置づけは置いておくとして、最初に山裾にAタイプの墓壇が造られ（その上に五輪塔などが建てられたものであろう）、その後テラス造成と共にBタイプの墓壇が造られた（上に一石五輪塔を中心とした石塔が建てられたものであろう）と考えられるのである。

次に、AタイプとBタイプの違いについてである。今述べたように、この両タイプは時期の違いを示していると考えられるが、それ以上に大きな形態の差は何を表しているのだろうか。Aタイプは平均長軸長1.08m、短軸長0.54mであるが、上昇には不可能な大きさであろう。現在までに知られた県内の中世墓の一般的な長軸長は1.5m以上であることを考えても、城前遺跡の墓壇は、土葬とは考えられない。実際、出土した人骨からは火葬の痕跡も認められ、AタイプもBタイプ同様、火葬骨を納付した「納骨穴」と考えられる。

しかし、Aタイプは火葬人骨を納めるだけには大きすぎる。その要因については不明とせざるを得ない。

次に、墓壇のあり方についてである。先に触れたように、AタイプもBタイプも共に原則的に二基1セットというあり方である。特に第7号と8号、第10号と11号、第12号と13号、第14号と15号には大きく二基を囲む掘り込みが認められる。更に興味深いのは、それぞれの2基が共通点を持っているということである。つまり、形態や大きさなど、仮にどちらかが最初に作られ後にもう1基が掘られたとしたら、これほど類似するとは考えられない。当初から2基が計画的に作られたことを意味していると考えられる。つまり、どちらか一方の死を契機として、逆葬墓として作られていた可能性が高いのである。

この遺跡では、明らかに墓ではない板碑（鏝刻板碑も含めて）もあり、継続的な年忌供養などの祭祀が行われていたことが推測されるが、そのひとつとして逆葬の仏事も行われていたことが考えられる。

また、当初から予定されていた2者は、夫婦であると考えるのが妥当であろう。そう考えられるとすれば、中世人の死生観とともに、中世の家族のあり方の問題に迫ることのできる事例とすることができる。

## 近世の高村焼

城前遺跡では、近世の道路状遺構の側溝から宇佐の高森焼（ホーロク焼）の製品が一定量出土している。高村焼は、現在の宇佐市高村において戦後まで焼かれ続けていた焼き物で、文献上の初見は鎌倉時代に遡る。中世の高村での土器生産については、文書史料以上のもは知られていないが、瓦質土器の生産については、特徴ある土器の分布から高村での生産の可能性が高いと思われる。

近世の土器については、宇佐を中心とした地域で遺跡の発掘調査で出土しており、筆者も「こねばち」の編年を行っているが、全体としての土器の変遷については未だ解明がなされていない。幸い、城前遺跡では各種の高村焼の製品が出土しているため、近世の高村焼を概観してみたい。

出土資料には、ホーロク（えごら）、コネ鉢、甕、スリ鉢、甕ゼイロがある。ホーロクは口縁端部を丸く内側に肥厚させ、内外面とも丁寧に磨かれている。最近まで使用されていた製品と基本的には変わらない。

コネ鉢は、変遷がわかっている番種であり、それによると129の口縁部が肥厚せず小さく外反するタイプのもは17世紀後半から18世紀前半までにおさまるものである。128は大型のもので、甕の口縁部の可能性もあるが、口縁部が肥厚し、小さく折れる形状から18世紀後半の年代が考えられる。胴部の130、131は幅広の突帯を巡らせるが、年代的にははまり込むことはできない。132は底部で、高台を付ける。

甕は最近まで使われていた製品にも様々な口縁部のバリエーションがあり、実際出土資料も様々である。133は口縁端部を内側に折り返し肥厚させるもの、134は口縁直下を鈎状に張り出させるもの、135は小さく直立する口縁部を作り出すものである。このようなバリエーションの存在は、モデルとなる甕のバリエーションの多きに起因するものであろう。

スリ鉢は、宇佐を中心とする地域において、15世紀から16世紀に底部内側に花弁状の摺り目を入れる瓦質のものが知られ、高村産であることが推測されるが、138は上質質のもので、同様の摺り目が認められる。城前遺跡では、他に15世紀から16世紀の資料の出土はなく、138も近世と考えられるが、特徴的な摺り目からやはり高村産であることが推測できる。ちなみに、民俗資料では高村産摺り鉢は知られていない。

甕ゼイロは、底部に焼成前の穿孔を持ち、米を蒸すのに使用されるが、民俗資料では口縁部の形状がコネ鉢と同様であり、口縁部の形状のみでは判別不能であるが、傾きによって判断できる。141と142は甕ゼイロの可能性が高い。

以上の出土資料の内、年代が押さえられるのはコネ鉢のみであり、17世紀後半から18世紀代のものである。共存する陶磁器は主に18世紀後半代からであり、高村焼の古相を呈するものもは18世紀後半代を中心とするものであろう。

## 遺跡

城前遺跡は、山の斜面にテラスを作りそこに竪穴を穿ち墓所としたものと、平地部ではその山に向かって伸びる溝が検出された中世の遺跡である。時間的には、まず溝が埋まった後に山の巾腹に宝塔や大型の五輪塔、板碑などが立てられる。ついで、山麓に墓地区が造られる。この時期に前後して清台寺が創建されている。また、周辺にはさまざまな石造物が造られるが、いずれも本来は堂などの施設に伴うものであったものであろう。

まず、溝について考えてみたい。幅3に、深さ2位でほぼ直線的に伸びるが、調査区の制約からどのように伸びるかは不明である。現在の地割や明治21年の川字図にもその痕跡は認められないので想定復元は困難であるが、南側は調査区外に延びており、まっすぐ延びるとすると、調査区外であと30位で真玉川によって形成された段丘の落ちに垂直にぶつかる。また一つの可能性としては、調査区外ですぐ西側に屈曲し、丘陵と一体となって、内部の何らかの施設を囲込む機能を持ったものであったことも考えられる。

そして、その溝が埋まった後、比較的短期間の内に五輪塔や板碑などの石塔を伴う墓地区が造られていくことになる。これは、清台寺の創建と関連を持つものであろう。清台寺が当初から臨済宗であったかは慎重であらねばならないが、もしそうであったなら六瀬山との関係より、真玉荘を実質支配し、後に六瀬山にも侵食していく武士勢力を想定することができる。そう考えられるとすると、この墓地区は、武士層の菩提寺に伴うものか、または

何らかの結縁によって集合した集団基地とすることができる。このいずれであるかは、今回の資料だけでは決し得ないことであり、さらに広範な調査が必要となるだろう。

## 付章 遺跡周辺の石造物

遺跡周辺には中世の石造物が点在する。その代表的なものをここで紹介し、遺跡の歴史的位づけを考える資料としたい。

69と70は調査区隣接地の清台寺の門前、参道脇左右に立っている。69の宝篋印塔は向かって右、70の宝塔は向かって左側になる。69の宝篋印塔は、階層突起が大きいのが特徴で、宝珠の部分は欠損している。九輪は6本しか現存せず、上部が折れている可能性があるが、上部がコンクリで固められているので現状では確認できない。消花の蓮華座は単弁、反花は複弁、その下の露盤は格狭間ではなく蓮子が刻まれている。塔身には笠に接する部分に納入穴を穿つ。室町時代の作であろう。

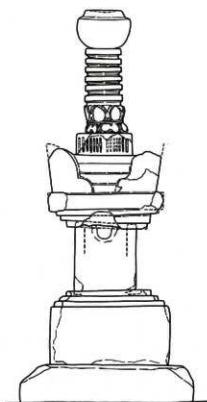
70は、国東半島では珍しい宝塔。通常大野川流域などの宝塔では上部が宝珠ではなく相輪が載るが、この例では宝珠が載っている。塔身、首節ともよく宝塔の形式を踏んでおり、平安時代末といわれる千歳寺宝塔と類似点があるが、宝珠の形状や笠の反りなどから、時代的には下のものであろう。塔身には「中興開基/安詳了機居士」「永承傳右工門之塚」と刻まれているが、当初のものかは疑わしい。

71は城前遺跡の約0.5\*。下流に位置する「薬師堂」にある国東塔である。相輪が全体の2分の1を占めアンバランスな感じを受けるが、すべて当初からのものと考えられる。各部は完存している。最下位の基礎に載る格狭間を刻む基礎と台座は一体である。格狭間と複弁の反花はしっかりしている。首節には小さな納入納入孔が穿たれている。笠上部の露盤の格狭間は1カ所で、相輪上部の宝珠は無文である。南北朝期から室町時代前半の可能性が高い。

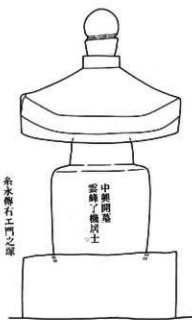
72は城前遺跡の対岸の山原にある堀内家墓地にある「異形国東塔」である。基礎と台座は一石である。台座の反花は複弁で比較的立体感のある彫りとなっている。やや縦長の塔身に首節が付き、反りのある笠が載る。その上部には、相輪ではなく、「異形」の根柢となる宝珠が載っている。異形国東塔の中では最末期（戦国末期）まで下るものではなく、室町時代で取まるものと考えられる。

73は堀内家墓地からやや山に入ったところにある「別十字堂」と呼ばれているところにある磨崖宝塔。数十年前に岩の上が割かれ落ちて発見されたということで、ほとんど風化が進んでおらず、彫刻当時のシャープさを保っている。深いところで5\*ほど彫り込んでおり、半肉彫りとなる。塔としてのバランスもよく古拙を感じるが、銘などはない。薬師堂国東塔（71）よりは古く、鎌倉時代後半から南北朝期に取まるものであろう。

74と75は、城前遺跡調査区の道を挟んで向かい側にある築地横に並べられている五輪塔である。城前遺跡出土五輪塔とは空風輪の形状が明確に異なるので、同化した。宝珠は丸みを帯びず、円柱状のものに刻みを入れて空輪と風輪に分けている形状で、天正6年の銘を持つ例に類似する。



69



糸水御石工門之原

中興開落  
雲峰了機居士

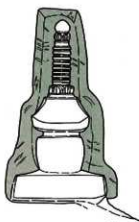
70



71



72



73



74



75



第31図 遺跡周辺の石造物

第2表 出土土器観察表

No.	器種	法量 (cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	備考	
		口径	器高			底径	内面				外面
1	土師器小皿	(復元) 8.6	0.8	(復元) 7.2	砂粒少ない 角閃石(少)長石(多) 赤色粒子(多)	ロクロ	ナテ、 回転ヨコナテ	回転ヨコナテ、 回転糸切り	良好	橙褐色	1/6片
2	土師器小皿	(復元) 8.2	0.9	(復元) 7.0	砂粒多い 玉石(少)赤色粒子(多)	ロクロ	ナテ、 回転ヨコナテ	回転ヨコナテ、 回転糸切り	良好	淡茶褐色	1/3片
3	土師器小皿	(復元) 7.6	0.8	6.2	砂粒少ない 内閃石(多)長石(多) 赤色粒子(多)	ロクロ	ナテ、 回転ヨコナテ	回転ヨコナテ、 回転糸切り後板状圧痕	良好	淡茶褐色	器部外周にスス付着
4	土師器小皿	(復元) 8.0	1.4	(復元) 5.8	砂粒少ない 長石(少)赤色粒子(少)	ロクロ	ナテ、 回転ヨコナテ	回転ヨコナテ、 回転糸切り	良好	茶褐色	1/2片
5	土師器小皿	(復元) 7.2	1.1	(復元) 6.2	砂粒少ない 長石(少)赤色粒子(少)	ロクロ	ナテ、 回転ヨコナテ	回転ヨコナテ、 回転糸切り	良好	淡褐色	1/4片
6	土師器小皿	(復元) 6.9	0.8	(復元) 5.5	砂粒少ない 内閃石(少)長石(多) 赤色粒子(多)	ロクロ	ナテ、 回転ヨコナテ	回転ヨコナテ、 回転糸切り	良好	淡茶褐色	
7	土師器杯	(復元) 13.5	2.0	(復元) 9.6	砂粒少ない 内閃石(多)長石(多) 赤色粒子(多)	ロクロ	ナテ、 回転ヨコナテ	回転ヨコナテ、 不明	良好	淡茶褐色	1/4片
8	土師器杯	(復元) 12.8	2.2	(復元) 9.2	砂粒多い 内閃石(少)長石(多) 赤色粒子(多)	ロクロ	ナテ、 回転ヨコナテ	回転ヨコナテ、 不明	良好	橙褐色	1/5片、内面に スス付着
9	土師器杯	(復元) 13.7	2.0	(復元) 8.7	砂粒少ない 内閃石(少)長石(多) 赤色粒子(多)	ロクロ	ナテ、 回転ヨコナテ	回転ヨコナテ、 回転糸切り	良好	淡褐色	1/4片
10	土師器杯	(復元) 12.0	2.4	(復元) 8.2	砂粒少ない 角閃石(多)長石(多)	ロクロ	ナテ、 回転ヨコナテ	回転ヨコナテ、 回転糸切り	良好	白橙褐色	1/5片
11	土師器杯	(復元) 13.7	1.4	(復元) 9.0	砂粒少ない 内閃石(多)長石(多) 赤色粒子(少)	ロクロ	ナテ、 回転ヨコナテ	回転ヨコナテ、 回転糸切り	良好	白黄褐色	1/2片
12	土師器杯	(復元) 9.4		(復元) 9.4	砂粒少ない 内閃石(多)長石(多) 赤色粒子(多)	ロクロ	ナテ、 回転ヨコナテ	回転ヨコナテ、 不明	良好	橙褐色	1/4片
13	土師器杯	(復元) 7.6		(復元) 7.6	砂粒少ない 角閃石(多)長石(多)	ロクロ	ナテ、 回転ヨコナテ	回転ヨコナテ、 回転糸切り	良好	淡褐色	1/3片
14	土師器杯	(復元) 9.0		(復元) 9.0	砂粒少ない 長石(少)	ロクロ	ナテ、 回転ヨコナテ	回転ヨコナテ、 板状圧痕	良好	淡褐色	1/5片
15	土師器杯	(復元) 9.8		(復元) 9.8	砂粒少ない 内閃石(多)長石(多) 赤色粒子(多)	ロクロ	ナテ、 回転ヨコナテ	回転ヨコナテ、 板状圧痕?	良好	淡茶褐色	1/4片
16	土師器杯	(復元) 9.0		(復元) 9.0	砂粒少ない 角閃石(少)長石(多)	ロクロ	ナテ、 回転ヨコナテ	回転ヨコナテ、 回転糸切り	普通	淡褐色	1/2片
17	瓦器土器環	(復元) 7.6	1.8	(復元) 7.6	精緻 角閃石(少)長石(少)	ロクロ	回転ヨコナテ後 回転ヨコナテ	回転ヨコナテ後 へラミ回転糸切り	良好	灰褐色	1/4片
18	瓦器高台付碗	(復元) 15.2	6.5	5.5	砂粒少ない 角閃石(多)長石(多) 赤色粒子(多)		ナテ、 ヨコナテ	指圧痕、ナテ、 ヨコナテ	良好	黒褐色 (内面に黄褐色)	
19	瓦器高台付碗	(復元) 15.2	5.0	6.0	砂粒少ない 角閃石(多)長石(多)		指ナテ、 ヨコナテ	指圧痕、ナテ、 ヨコナテ	良好	暗灰褐色	1/2片
20	瓦器碗	(復元) 12.4			砂粒少ない 角閃石(多)長石(多) 赤色粒子(少)		ナテ、 ヨコナテ	ナテ、 ヨコナテ	普通	灰色	
21	瓦器土器 高台付碗	(復元) 31.6		(復元) 4.6	精緻 角閃石(多)長石(多)		ナテ後へラミ ガキ	ナテ	良好	灰褐色	
22	土師器土鍋	(復元) 31.6			砂粒多い 長石(多)白色粒子(多)		ヨコハケ、 ヨコナテ	指圧痕、ナテ、 ヨコナテ	良好	灰白黄褐色	1/6片
23	土師器土器土鍋	(復元) 31.4		(復元) 4.6	砂粒少ない 長石(多)		ヨコハケ、ヨコナテ	指圧痕、ヨコナテ、 ナテ、ナテ	良好	淡褐色	口縁外周にスス付着
24	土師器(?)	(復元) 20.4			砂粒少ない 角閃石(多)長石(多)		ナテ ヨコナテ	ナテ、 ヨコナテ	良好	淡褐色	外周にスス付着
25	土師器土鍋(?)	(復元) 25.8			砂粒多い 石英(多)		ヨコハケ、 ヨコナテ	指圧痕、ナテ、 ヨコナテ	良好	白黄褐色	1/8片
26	土師器土鍋	(復元) 15.2			砂粒少ない 長石(少)石英(少)		ヨコハケ、 ヨコナテ	指圧痕、ナテ、 ヨコナテ	良好	白灰褐色	1/6片
27	瓦器土器?口罐	(復元) 28.5			精緻 長石(少)		ヨコハケ、 ヨコナテ	指圧痕、ナテ	良好	白灰褐色	
28	土師器小皿	(復元) 6.8	1.0	(復元) 5.6	砂粒少ない 長石(少)赤色粒子(少)	ロクロ	ナテ、 回転ヨコナテ	回転ヨコナテ、 糸切り離し	良好	淡茶褐色	1/3片
29	土師器小皿	(復元) 7.6	1.5	(復元) 7.0	砂粒少ない 長石(少)赤色粒子(少)	ロクロ	ナテ、 回転ヨコナテ	回転ヨコナテ、 糸切り離し	良好	淡茶褐色	1/3片
30	土師器杯	(復元) 7.2			砂粒少ない 長石(少)	ロクロ	回転ヨコナテ	回転ヨコナテ、 回転糸切り	良好	茶褐色	1/4片



No.	器 種	法 量 (cm)			胎 土	成形	調 整		焼成	色 調	備 考
		口徑	器高	底径			内 面	外 面			
31	土師器環			(復元) 9.0	砂粒少ない 角閃石(少)長石(多)	ロクロ	ナデ、 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ、 回転糸切り	良好	淡茶褐色	1/5片
113	陶器鉢			(復元) 10.4	精緻	ロクロ	ナデ	回転ヘラズリ、 ヨコナデ	良好	赤茶褐色	
114	陶器底部			(復元) 9.2	精緻	ロクロ	ロクロ目	回転ヨコナデ	良好	灰色	
115	瓦葺十筋 カメ底部			(復元) 13.8	砂粒少ない 長石(多)石英(多量)	ロクロ	ナデ	ナデ	良好	暗灰色	
116	瓦葺器底部	(復元) 14.0			砂粒多い 長石(少)石英(多)		スリ目	ナデ	普通	白黄褐色	
117	瓦葺上蓋フタ	(復元) 8.8			精緻 角閃石(少)長石(多)	ロクロ	ナデ、 回転ヨコナデ	花(スタンプ)	良好	暗灰色	
118	瓦葺火鉢口縁	(復元) 24.0			精緻 長石(多)		ナデ、ヨコナデ →ヘラミガキ	ナデ、ヨコナデ →ヘラミガキ→藍文	良好	暗灰色	1/2片
119	瓦葺火鉢口縁	(復元) 16.6	2.0		精緻		ヨコナデ	ヨコナデ→ ヘラミガキ	良好	暗灰色	1/6片
120	瓦葺?口縁	(復元) 22.8			精緻 角閃石(少)長石(少)	ロクロ	回転ヨコナデ →ヘラミガキ	回転ヨコナデ →ヘラミガキ	良好	暗灰色	1/4片
121	瓦葺火鉢口縁	(復元) 22.0			精緻 石英(少)	ロクロ	ナデ、 回転ヨコナデ	ナデ、 回転ヨコナデ→藍文	良好	灰色	外面にスス付着
122	瓦葺火鉢口縁	(復元) 21.0			精緻	ロクロ	回転ヨコナデ	ヨコナデ→ 藍文	良好	灰色	内外共スス付着
123	瓦葺火鉢口縁	(復元) 20.8			精緻 長石(少)	ロクロ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ ヘラミガキ	良好	灰色	外面にスス付着
124	瓦葺土蓋?口縁	(復元) 21.4			精緻 長石(多)	ロクロ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	良好	灰色	1/5片
125	瓦葺火鉢脚			(復元) 15.6	精緻	ロクロ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	良好	灰色	1/2片
126	高村焼ホーロク	(復元) 35.0			精緻 長石(多)		ナデ、 ヨコナデ	ヘラケズリ、 ヨコナデ	良好	淡茶褐色	1/5片 内面にスス付着
127	高村焼ホーロク	(復元) 33.5			精緻 角閃石(少)長石(多) 赤色粒子(多)		ナデ	ヘラケズリ、 ヨコナデ	良好	内)淡茶褐色 外)暗褐色	1/5片
128	高村焼コネ鉢 口縁	(復元) 44.0			精緻 角閃石(少)長石(多) 赤色粒子(多)	ロクロ	回転ヨコナデ	ヘラケズリ、 回転ヨコナデ	良好	暗褐色	口縁に丹塗り
129	高村焼コネ鉢	(復元) 34.8			砂粒少ない 角閃石(少)長石(少) 赤色粒子(多)		ヘラミガキ	ヘラケズリ ヨコナデ	良好	淡茶褐色	口縁内面3cm丹塗り
130	高村焼コネ鉢 胴部				精緻 長石(多)赤色粒子(少)		ナデ ヘラミガキ	ナデ	良好	橙褐色	胴縁大径(復元) 32.3cm
131	高村焼コネ鉢 胴部				精緻 長石(多)赤色粒子(少)		ナデ→ ヘラミガキ	ヘラケズリ、 ヨコナデ	良好	橙褐色	胴縁大径(復元) 31.2cm
132	高村焼コネ鉢 底部			(復元) 22.0	砂粒少ない 角閃石(少)長石(多) 赤色粒子(少)	ロクロ	ヘラミガキ	ヨコナデ	良好	橙褐色	
133	高村焼カノ口縁	(復元) 28.8			精緻 角閃石(少) 赤 白色粒子(多)	ロクロ	回転ヨコナデ →ヘラミガキ	回転ヨコナデ →ヘラミガキ	良好	淡茶褐色	1/2片
134	土師器カノ口縁	(復元) 32.5			砂粒多い 角閃石(多)長石(多)地 石英(少)		ヨコナデ	ヨコナデ	良好	淡茶褐色	外面にスス付着
135	高村焼カノ口縁	(復元) 20.4			砂粒少ない 角閃石(少)長石(多)		ヘラケズリ、 ヨコナデ	ヘラケズリ、 ヨコナデ	良好	淡褐色	1/2片
136	高村焼カノ胴部	(復元) 32.6			砂粒少ない 長石(少)		ナデ	ヘラケズリ後 ヘラミガキ、ヘラ調整	良好	橙褐色	
137	土師器?底部	(復元) 18.6			砂粒少ない 長石(多)赤色粒子(多)		ナデ	ナデ、 ヨコナデ	良好	暗褐色	
138	土師器鉢底部			(復元) 14.0	砂粒少ない 長石(多)		スリ目、(底部 は花文状)	ナデ	良好	淡茶褐色	
139	ホーロク口縁				砂粒多い 長石(多)		ヨコナデ→ ヘラミガキ	ヨコナデ	良好	暗褐色	内面に赤色顔料 付着か?
140	ホーロク口縁				砂粒少ない 角閃石(多)長石(多)地 赤色粒子(多)		ナデ、 ヨコナデ	ヘラケズリ、 ヨコナデ	良好	淡茶褐色	外面にスス付着
141	高村焼コネ鉢 口縁				精緻 角閃石(少)長石(多)		ヨコナデ	ヨコナデ	良好	淡茶褐色	内面丹塗り

No.	器種	法量 (cm)			胎土	成形	調整		焼成	色調	備考
		口径	器高	底径			内面	外面			
142	高村龍コネ鉢 口縁				備致 角四石(少)長石(多)		ヨコナア	ヨコナア	良好	淡茶褐色	内面丹塗り
143	カメ口縁	(復元) 69.2			砂粒多い 灰分多量の胎土(母胎) 鉄質磁子(少), 赤雲母(前)		ナア→部分的にヘラミ ガキ(口縁上縁は濃緑)	ナア後部分的にナア、 ヨコのヘラミガキ	良好	橙褐色	

第3表 出土陶磁器観察表

No.	器種	法量 (cm)			成形	装飾			底面 内底	製作地	製作年代	備考
		口径	器高	底径		絵付・釉薬	文様	装飾特徴				
32	磁器皿			6.60	ロクロ	青磁	不明	スタンプ		中国	14~15C	V類
33	陶器碗	7.40	5.50	3.20	ロクロ	透明				信楽	18C後~19C	
34	磁器碗			4.60	ロクロ	染付・透明				肥前系	18C後	見込蛇/目輪前ぎ
35	磁器碗			4.70	ロクロ	染付・透明				肥前	18C後	見込蛇/目輪前ぎ
36	磁器碗	10.00	5.10	4.20	ロクロ	染付・透明	二重網目			肥前	18C後半	くらわんか
37	磁器碗	10.00	5.10	4.00	ロクロ	染付・透明	二重網目			肥前	18C後	くらわんか
38	磁器碗	9.60	5.20	3.40	ロクロ	染付・透明	二重網目			肥前	18C後	くらわんか
39	磁器碗	10.20	5.25	4.00	ロクロ	染付・透明	二重網目			肥前	18C後	くらわんか ゆがみアリ
40	磁器碗			3.00	ロクロ	染付・透明	梅樹・雪輪		大明年製 くずれ銘	肥前	18C後	くらわんか
41	磁器碗			4.20	ロクロ	染付・透明	見込: 山水?			肥前	18C後	くらわんか
42	磁器碗	11.20	5.20	4.00	ロクロ	染付・透明	丸文			肥前	18C後	くらわんか 見込み蛇/目輪前ぎ
43	磁器碗			4.80	ロクロ	染付・透明	見込: 五弁花 外: 丸文	コンニャク 印判?		肥前	18C後	くらわんか
44	磁器碗			3.80	ロクロ	染付・透明	草花			肥前	18C代	
45	磁器碗	9.90	4.70	3.90	ロクロ	染付・透明	梅樹			肥前	18C後	くらわんか
46	磁器碗			3.80	ロクロ	染付・透明	梅樹・雪輪			肥前	18C後	くらわんか
47	磁器碗			4.10	ロクロ	染付・透明	梅樹・雪輪		点あり	肥前	18C後	くらわんか
48	磁器碗			4.00	ロクロ	染付・透明	梅樹・雪輪		大明年製 くずれ銘	肥前	18C後	煮成不良・くらわんか
49	磁器碗			3.80	ロクロ	染付・透明			大明年製 くずれ銘	肥前	18C後	くらわんか
50	磁器碗	8.20	5.35	3.20	ロクロ	染付・透明	見込: 花十字? 輪? 外: 丸文			肥前	18C後	丸形染香茶碗
51	磁器碗			4.80	ロクロ	染付・透明	見込: 五弁花	コンニャク 印判		肥前	18C後	
52	磁器碗			3.80	ロクロ	染付・透明 内: 青磁 外: 青磁	見込: 五弁花	コンニャク 印判	三方形 の裏面	肥前	18C後	
53	磁器碗			4.80	ロクロ	染付・透明	見込: 五弁花; 二重網目 外: 植物	コンニャク 印判	装(便形)字 題?	肥前	18C後	
54	磁器碗	7.90	6.00	4.20	ロクロ	染付・透明	見込: 五弁花 外: 矢羽根 内: 西方尊		くずれた 裏面	肥前	19C後	同形碗
55	磁器碗			3.80	ロクロ	染付・透明	見込: 花? 植物?			肥前系	18C後	
56	磁器碗			5.00	ロクロ	染付・透明	見込: 五弁花 外: 丸文	コンニャク 印判		肥前系	18C代	見込蛇/目輪前ぎ
57	磁器碗	8.20	4.40	3.40	ロクロ	染付・透明	見込: 花 外: 寿・こうもり			肥前	18C後~未	小仏東碗
58	磁器碗	9.60	5.60	3.60	ロクロ	染付・透明	外: 欄目文 前格子 見込: 井桁?			肥前	1820~ 1860年代	
59	磁器碗			3.40	ロクロ	染付・透明	外: 亀甲 見込: 井桁?			肥前	1820~ 1860年代	端反碗? 二次焼成
60	磁器碗			3.60	ロクロ	染付・透明	見込: 水? 外: 笹			肥前	1820~ 1860年代	端反碗
61	磁器碗	10.20			ロクロ	染付・透明	花			肥前	1820~ 1860年代	

No.	器種	法量 (cm)		成形	装飾			底面 内底	製作地	製作年代	備考	
		口径	器高		底径	絵付・釉薬	文様					装飾技法
62	磁器碗			3.60	ロクロ	染付・透明	見込：井桁		肥前	1820～ 1860年代	端反碗	
63	陶器碗	10.00			ロクロ	染付・透明	外：笹		肥前	1820～ 1860年代	端反碗	
64	磁器碗	10.40	6.00	4.00	ロクロ	染付・透明	見込：不明 外：花		肥前	1820～ 1860年代		
65	磁器碗			4.00	ロクロ	染付・透明			肥前	18C後～19C	焼成不良	
66	磁器碗		7.45	6.40	ロクロ	染付・透明	見込：くずれた寿 外：草花		肥前	1780～ 1810年代	止車碗 砂がみあり	
67	磁器猪口			3.60	ロクロ	染付・透明	植物？		肥前	18C後～	くらわんか	
68	磁器小杯	6.40	5.20	3.20	ロクロ	染付・透明	蝶		肥前	19C中頃		
69	磁器碗	13.50	3.80	8.00	ロクロ	染付・透明	見込：五弁花 外：竹笹	コンヤク 印判	肥前	1780～ 1810年代	筒形碗	
70	磁器碗			6.50	ロクロ	染付・透明	植物		肥前	1780～ 1810年代	広東碗	
71	磁器猪口			4.60	ロクロ	染付・透明	つる草？		肥前	18C後～		
72	磁器瓶			6.60	ロクロ	染付・透明			肥前	19C中頃		
73	磁器皿	9.70	2.60	4.70	ロクロ	染付・透明	見込：五弁花 内？外：折れ松葉	コンヤク 印判	肥前系	18C後		
74	磁器小皿	3.40	2.85	3.00	ロクロ	染付・透明	格子文？		肥前系	19C代	見込絵ノ目輪割ぎ	
75	磁器小皿	7.50	1.95	5.20	ロクロ	染付・透明	禅文		肥前	18C後～19C		
76	磁器皿	13.90	4.20	8.20	ロクロ 型打ち	白磁		並ノ目 四重高台	肥前	18C前	菊花形皿	
77	陶器皿	18.00	3.80	8.20	ロクロ	染付・透明	草花		肥前	18C後		
78	磁器皿			14.00	ロクロ	染付・透明	龍		肥前	18C		
79	磁器鉢	18.80	8.75	8.90	ロクロ	染付・透明	内：樓閣山水・雷文 外：舟・山水	墨弾き 並ノ目 四重高台	肥前	19C中頃		
80	磁器鉢	18.90	9.30	8.85	ロクロ	染付・透明	内：樓閣山水・雷文 外：舟・山水	墨弾き 並ノ目 四重高台	肥前	19C中頃		
81	磁器鉢	20.6	8.50	12.00	ロクロ	染付・透明	植物 丸文に馬	墨弾き 並ノ目 四重高台	肥前	19C中頃		
82	陶器皿	13.50	3.80	8.00	ロクロ	染付・透明	見込：五弁花 外：草 外：蓮葉草	コンヤク 印判	通橋 一重高台	肥前	18C後	
88	磁器碗	3.40	5.30	4.60	ロクロ	染付・透明	梅樹・雪輪	大明年製 くずれ窯?	肥前	18C後		
89	磁器碗			4.00	ロクロ	染付・透明	梅樹・雪輪		肥前	18C後	くらわんか	
90	磁器碗	9.30	3.60	3.20	ロクロ	染付・透明	植物		肥前	18C後	くらわんか	
91	磁器皿	9.60	2.60	4.80	ロクロ	染付・透明	見込：五弁花 内？外：折れ松葉	コンヤク 印判	肥前	18C後		
92	磁器猪口	7.90	5.90	5.80	ロクロ	染付・透明	山水	口紅	肥前	18C後～	焼成不良	
93	磁器皿				ロクロ							
94	磁器皿			5.40	ロクロ	染付・透明	見込：扇状の松竹梅 外：植物		肥前	18C後		
95	磁器皿	13.40	3.30	7.20	ロクロ	染付・透明	植物？		肥前	18C後	見込絵ノ目輪割ぎ	
96	磁器皿	9.40	2.40	3.60	ロクロ	染付・透明	？		不明	明治10年代	見込絵ノ目輪割ぎ	

No.	器種	法量 (cm)			成形	装飾			底面 内底	製作地	製作年代	備考
		口径	器高	底径		絵付・釉薬	文様	装飾器				
97	人形											
98	陶器碗			6.10	ロクロ	白磁				中国	12C	V類
99	陶器鉢			8.50	ロクロ					関西系	19C	目跡6ヶ
100	陶胎碗	10.40	6.70	4.00	ロクロ	染付・透明	山水			肥前	18C後	
101	陶胎碗			5.50	ロクロ	染付・透明				肥前	18C前	
102	陶器碗	9.50	5.90	3.90	ロクロ	鉄絵・透明	山水			不明	18C後～	丸碗
103	陶器碗	9.20	5.00	3.20	ロクロ	透明				京東系	18C～19C	
104	陶器碗	10.20	5.40	4.20	ロクロ	透明				不明	18C～19?	
105	陶器碗			4.20	ロクロ					不明	不明	
106	陶器碗			4.40	ロクロ					肥前	18C～19C	見込絵/目跡調査
107	陶器碗			5.60	ロクロ	透明						
108	磁器小杯	7.00	4.00	2.80	ロクロ	透明					18C～19C	
109	磁器小杯	7.00	3.90	2.60	ロクロ	透明					18C～19C	
110	香炉?			3.40	ロクロ	青磁						
111	磁器小鉢	7.20			ロクロ	染付 銅絵 透明	松・山水			関西	19C前	
112	磁器上瓶	11.0			ロクロ	透明?			不明	関西	19C	

写真図版



遺跡全景（南から）



遺跡全景（西から）

図版2



溝 (北から)



溝 (北から)



墓塚群近景



第3テラス



第3テラス



第5テラス



第4テラス



第4テラス





第5テラス



第8テラス



磨崖板碑 (西から)



磨崖板碑 (東から)



磨崖板碑 (部分)



第1号岩屋



第2号岩屋



第3号岩屋 (ガラジン様)

图版4



第1号坑横出状况



第8 (左)、7 (右) 号



第11 (左)、10 (右) 号



第13 (左)、12 (右) 号



第15 (左)、14 (右) 号



第18 (左)、17 (右) 号



第47、48号坑横出状况



第47 (左)、48 (右) 号



板碑 (第16図)



道路跡



清台寺墓地



清台寺墓地



板碑3 (清台寺墓地)



板碑4 (清台寺墓地)



清台寺

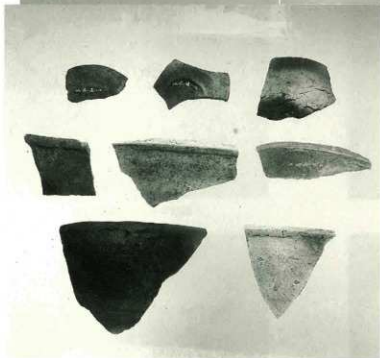


薬師堂国東塔

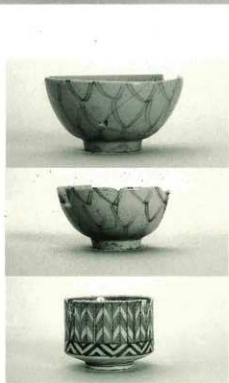
图版 6



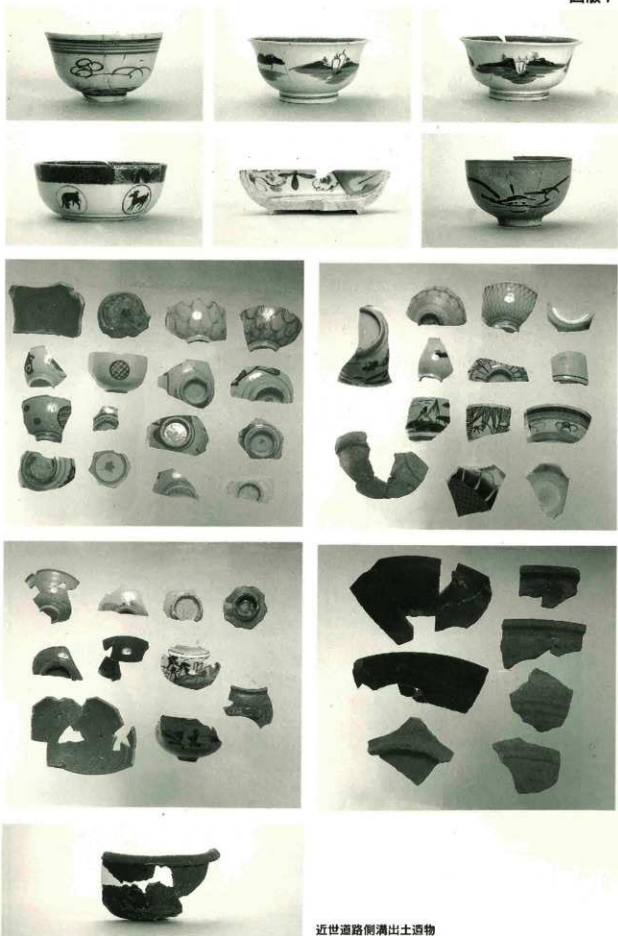
墓坑出土遺物



中世溝出土遺物



近世道路側溝出土遺物



近世道路側溝出土遺物

图版 8



22



23



24



14



80



15



33



34



36



37



65

# 報 告 書 抄 録

ふりがな		じょうのまえいせき						
書名		城前遺跡						
副書名		県道赤根真玉線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告						
巻次								
シリーズ名		大分県文化財調査報告書						
シリーズ番号		第130輯						
編者名		小柳和宏						
編集機関		大分県教育委員会						
所在地		〒870-8503 大分県大分市内町3丁目10-1 TEL097-536-1111						
発行年月日		2001年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
じょうのまえいせき 城前遺跡	真玉町大字城前字 フチ	44302	111054	33° 35'	131° 31' 20"	990906   991224	800m <sup>2</sup>	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
城前遺跡	築地	中世	溝 墓坑	土器類 陶磁器類 石塔類				

---

大分県文化財調査報告書 第130輯

城 前 遺 跡

—県道赤根真正線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

2001年3月31日

発行 大分県教育委員会

〒870-8503

大分市府内町3丁目10-1

0975-536-1111 (内5498)

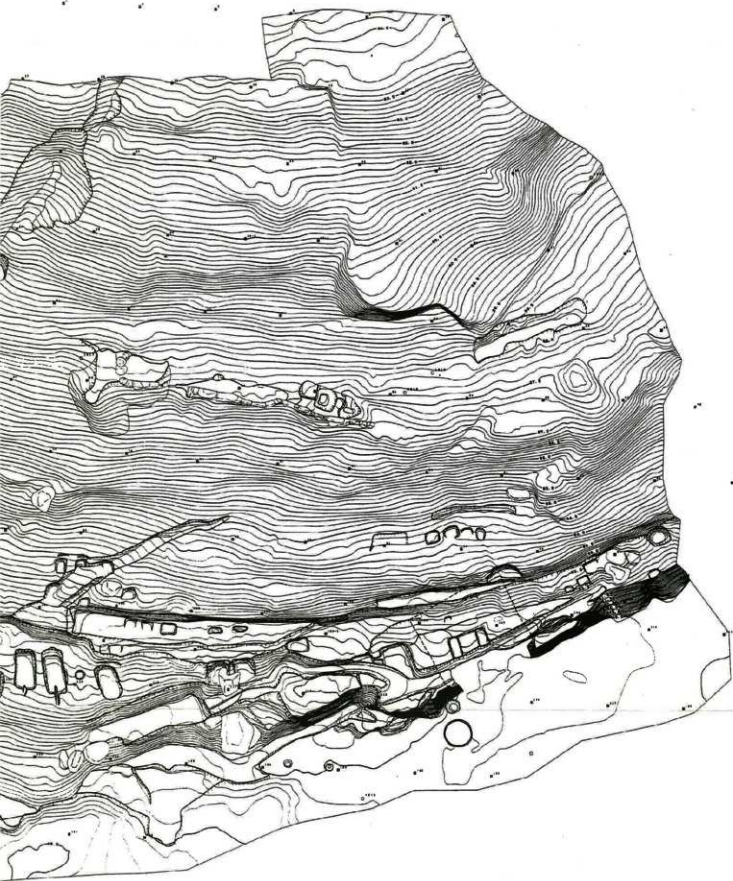
---





城前遺跡 平面圖 S=1:100





《大分県文化財調査報告書  
第130輯 城前遺跡》付図